

川合雅之冊

師範學校編輯  
小學讀本

翻刻

一



師範學校編纂

# 小學讀本

明治七年 八月改正 文部省刊行



小學讀本第一

第一

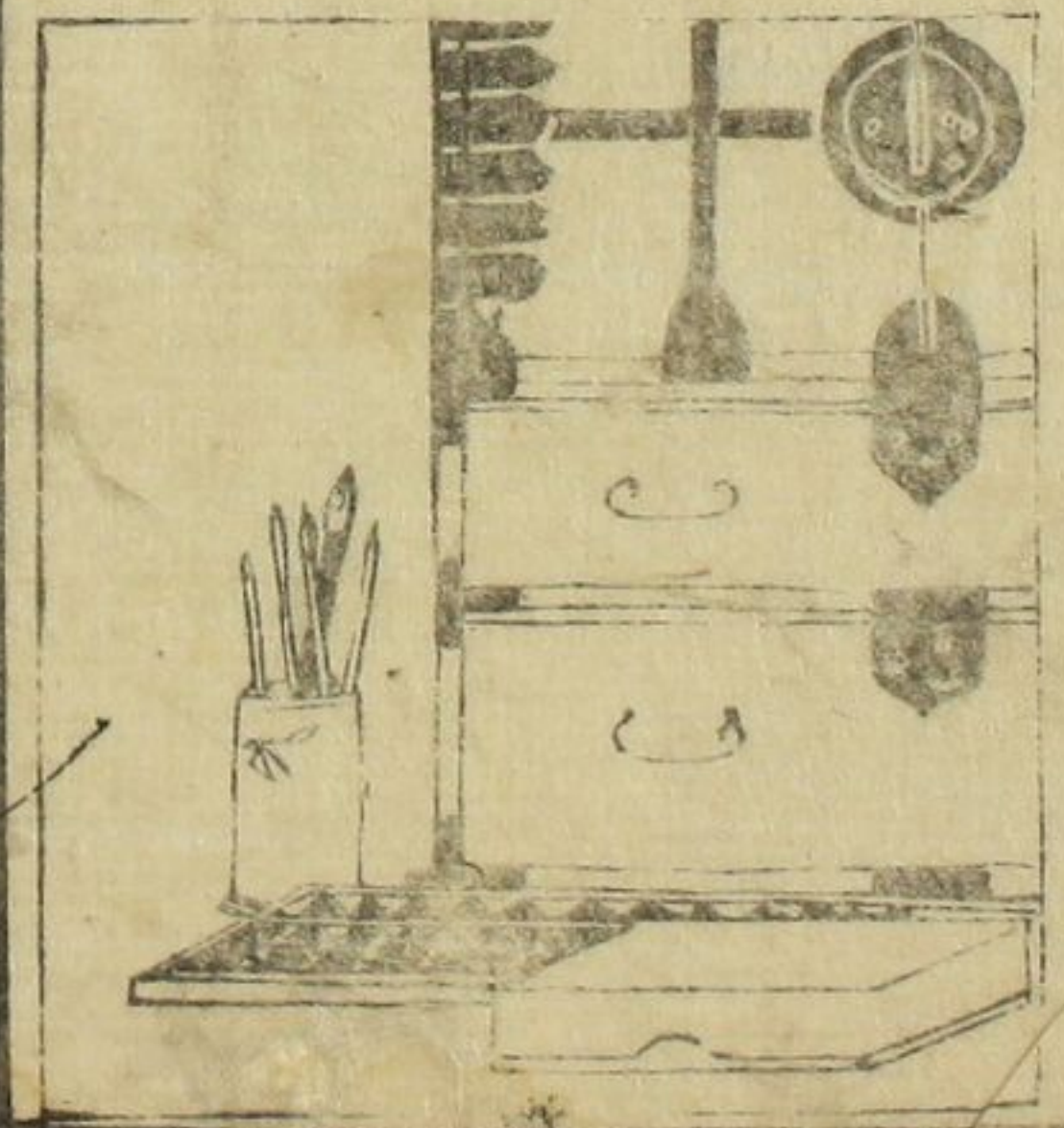
凡地球上の人種  
は五つに分けらる  
亞細亞人種、歐羅  
巴人種、馬來人種、  
亞米利加人種、亞  
弗利加人種是也



田中義廉 編輯

那珂通高 校正

日本入、亞細亞人種の中あり  
 人、賢きものと愚なるものとあるハ多く學ぶ  
 と、學ばざると、由りてあり賢きものハ世に用  
 ちられて、愚なるものハ人ニ捨てらるること  
 の道あるべ、幼稚のときより、能く學びて、賢きも  
 のとなり、必無用の人と、ある  
 ことある也  
 幼稚のときハ先、日用什器の  
 名を記して、其用カ方を知る  
 べし、○筆ハ字を寫し、又畫を



寫を具なり、○算盤ハ、物を數ふる用ニ供ハ、○文  
 庫ハ書籍を納る、箱あり、○筆筒ハ、衣裳おとを  
 入る、器なり、  
 又平生、食をばきもの、名を記してこれを調理し  
 て、食物とお以法を、知るべし  
 ○食物と、おをばきものニ種  
 々あり、  
 第一ハ、穀物なり、○穀物とハ  
 稻、麥、豆、粟、黍の類をいふ、○此  
 等ハ、皆田畠ニ作りて、其實を



小學讀本 卷一  
 文部省

取り、或は炊き、或は炙りて、食物と成るなり

第二の、肉類あり、○肉類とて、魚鳥獸肉の類なり

ふ、○此等の或は炙り、或は煮て、食物と成るなり、

第三の、菓あり、○菓は、葡萄、梨、梅、桃、柿、橙、蜜柑の類

をいふ、○此等の多く、生て

食し又鹽を漬けて、食物と成

るもあり

第四の、菜蔬の類なり、○此等

は、畠より種を播くものと、野より

自生するものとり、○多く



は、煮て食し又鹽漬と成るものなり、○凡て菜は、葉

と根とを食物とし、又實を食物と成るものなり、○

此の如く平生用ふる、食物、什器をば、能く心を留

めて、忘るることなからん

人の業は、種々ありて、其學ぶべきところ、各異

なり、然れども、先書を読み、字を寫し、物を數ふる

ことを、學ぶを、第一の務とし、これを普通の學と

いふ、○この學を、為さざれば、何れの業をも、習ふ

こと能えざ

故に人、六七歳に至ると、皆小學校に入りて、習

通の學、從ふべし。○小學校ハ、士農工商、必  
學ぶべきの業を授くる所なり。

學校ニ到りてハ何事も、一心ニ師の教ニ順ヒ勉  
強シテ學ぶべし、

何事を學ぶるも勉強を第一とし、勉強せざれば  
學問ニ上達せむこと能はず

一事ヲモ、記シ得る所ハ、能ク心を用ゐテ、忘  
るべからず

初より、多く記せんときき、却て忘るるもの多  
し故、又怠なく日毎ニ、一事を記シ得て忘れざる

ときハ其記し得る所の事自歳と共に積もり  
て多きに至るべし

他人の一事を讀む所ハ、百たびもこれを讀み、他  
人の十たび習ふ所ハ、千たびも、これを習ふべし、

○斯の如く、勉強して怠りなれば必多く事を  
記し得らるべきなり。○愚なるものも多く事を

記し得るときハ無用の人たることを免るべし、  
學校ニ入リ、授業の暇ニ、遊歩の時間あり、○此時

間ニハ、遊歩場ニ出て、身を動かし心を慰むべ  
し。○怠なく勉強し、後ニ遊歩するハ、あとし

樂となるものなり、  
故に遊歩を、樂とせんしが  
もたぐ授業の時間、怠ふ  
く、勉強をべし

遊歩場より出ると、男兒の戯  
る一技ハ、種々さまざま決  
して危き遊をハ、女はべら  
らば、○輪を廻ハ、紙鳶を  
飛ぞ一球を、投ぐる等を、宜しとす、○朋友相集り  
て、遊ふときハ、自擅し、て他人の、樂を妨ぐべからず



らざ

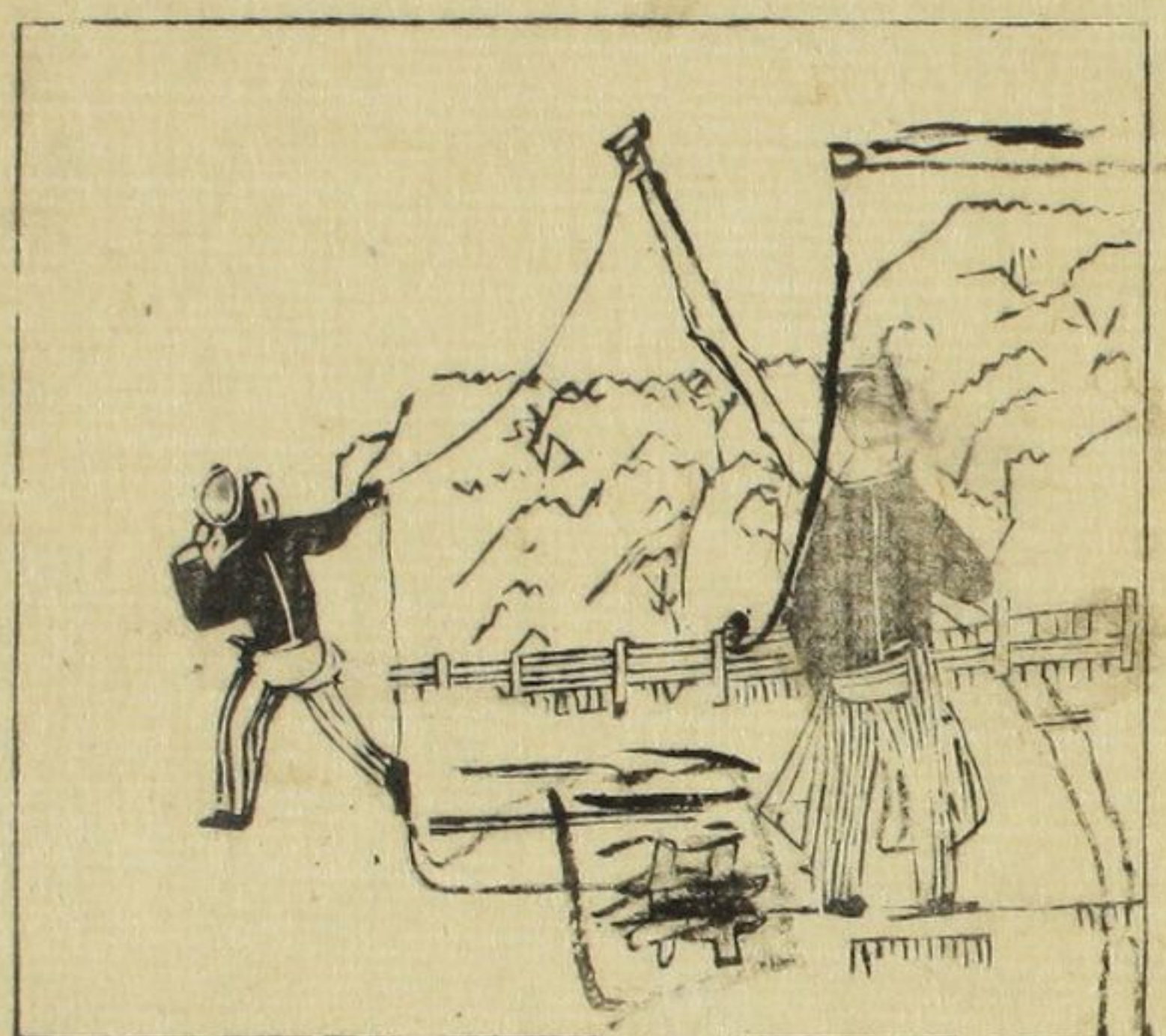
女子の遊へ、男兒と異り、  
走り旋るなどの、戯を、  
をべりらば、○朋友を、伴な  
ひて遊ぶ時ハ、心を和らげ  
て、何事も親しくをべし

第二

我等ハ、河の中にて、遊ばんとす、岸の邊へ水淺き  
ゆゑ、水に入りて、遊ぶことを得べし、○河の正  
中の深き處は、遊ぶべからず、若し深き所は、沈



むときハ復出つるこ  
 能ハざらべー○汝又  
 裳ハ濕ひたきバ陸上  
 りて、これを乾きべー、○  
 汝ハくの小舟に乗らん  
 とするら○小舟ハ覆へ  
 り易き故漫又乗るべか  
 らげらー過つ時ハ水又  
 陥りて、其命を失ふこと  
 らるべー、



○其舊き帽ハ破ととつゆ  
 ぬる新しき帽ヲ持てり  
 彼ハ新しき帽ヲ持てり  
 ことあらべー、

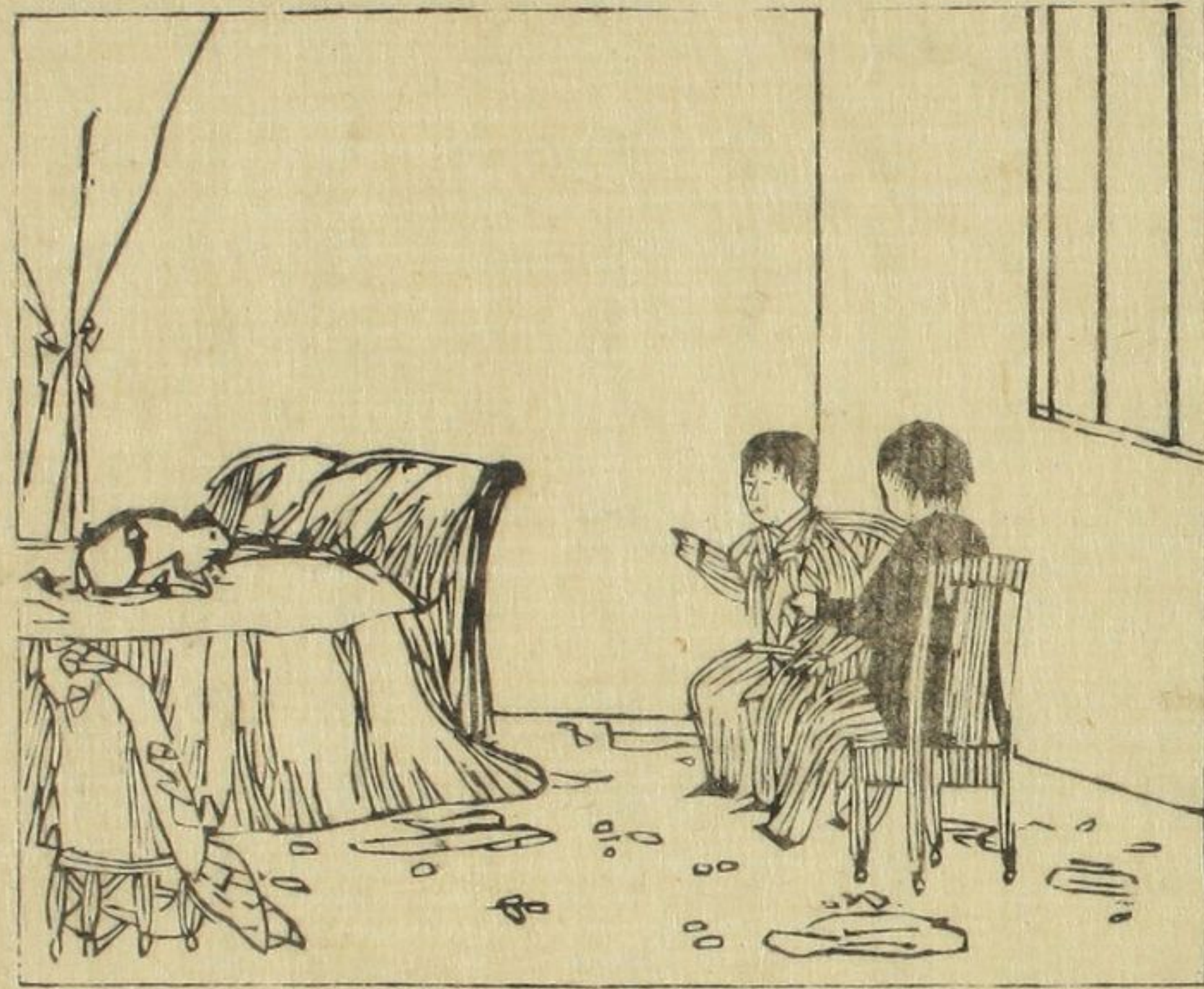
此兒ハ、新しき紙鳶を持てり○彼ガ糸を持ちて

走るを見よ○彼ハ紙鳶  
 を高く飛ばせんと思ふ  
 あり、○汝ハ紙鳶の颯  
 を、欲きるら○紙鳶の颯  
 りとるときハ能く心を  
 用ふよ○糸の樹ニ纏ふ  
 ことあらべー、

あり○新いき帽を、心を  
用ゐて或は毀り、或は濡す  
べからん○凡て新いき時  
より大切に持て、後また  
も破れ難し故に、何物も  
も鹿末よをべからず、若心  
を用ゐて、て毀つこと  
ら、その罪を免るべから  
ん



此猫を見よ、浴盆の床の上を坐せり、これよき猫



を、許さべからん○汝は、此猫の鼠を捕るを見

またり、汝は猫  
を追ひ退くること  
得べし、○吾手を出  
さば、必猫は、噛ま  
る○猫は、他所に、追遣  
るべき、又此所を留  
め置べき、○猫は、此  
室の中を、留め置と雖  
も、床の上を、上ること



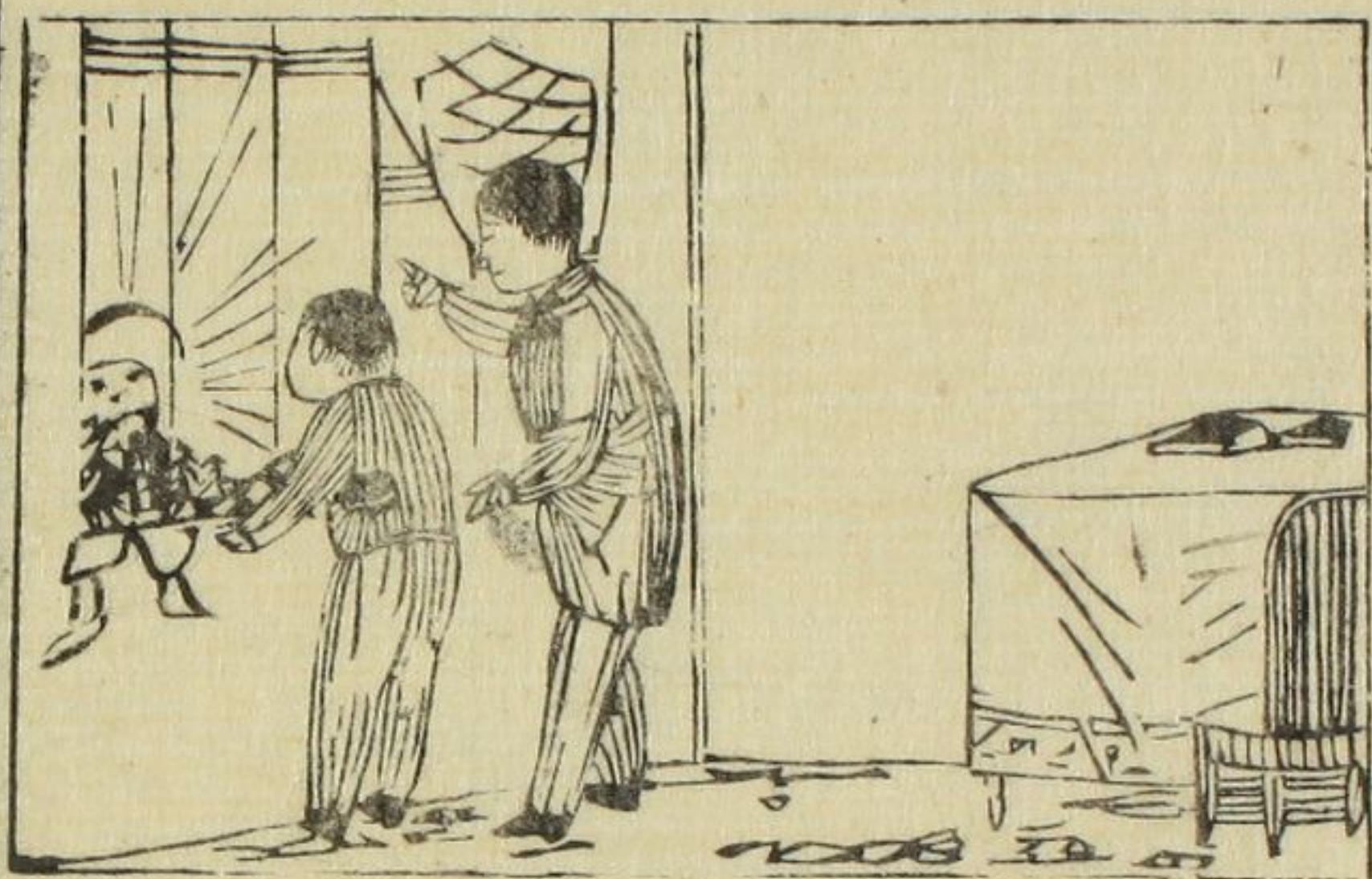
たりや○見たる、夜間鼠を捕ふること屢なり  
 汝ハ小舟又乗むる人を見  
 たりや、彼ハ何如よりて其  
 舟を行るや、○彼ハ、櫂を以  
 て小舟を漕けり  
 群兒、相集り、球を投げて、遊  
 ひ居たり、○彼等の棒を時  
 てるハ投げたる球を、受留  
 るを以て、樂とたろり、着  
 其球を受留ると、能ハざ



等の、起き出つべき時の、米をなうと思ふべし



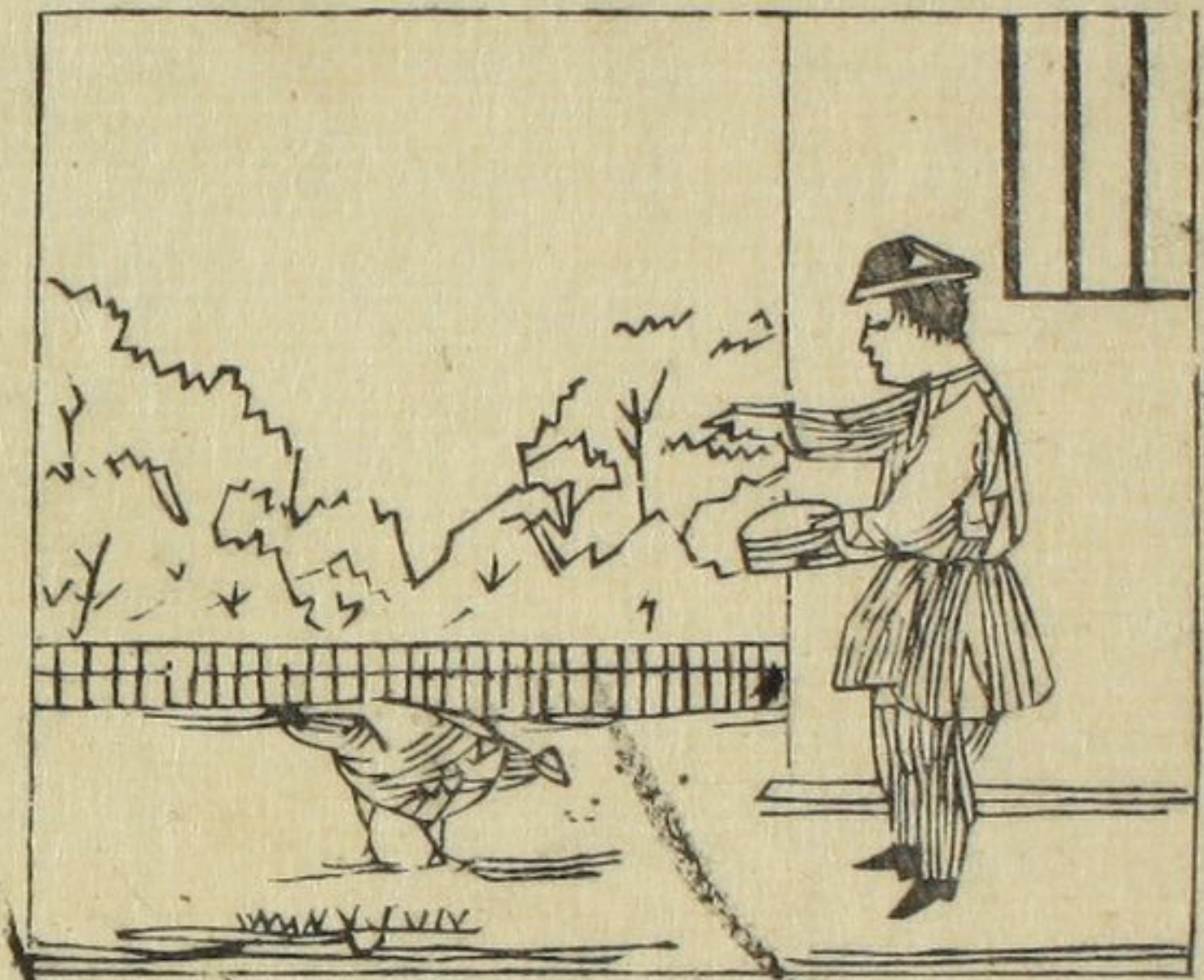
る者々ハ、負とさるあり、○  
 此球ハ、柔よりて、堅きもの  
 又、何れもぎるゆゑ、人子中々  
 ても、傷くことあり、○此ハ  
 善き遊ばれども、熱き日又  
 ハ、早く、これを止め、又、酷  
 き熱きに觸るゝときハ、身  
 を、害ふを以て、  
 大陽の、昇りたるときハ、我



○大陽の、昇りたる、後までも猶寢所を、臥せこと  
 赤かき○我等へ、大陽をば、見ることを得まども  
 其出つるを見ることなり、○  
 汝へ、大陽の赤きを見たるこ  
 とりりや、大陽の赤きとき、  
 大抵早むるものなり  
 此れへ、林檎の樹なり、○汝へ  
 此樹の、蕾を見たりや、○此樹  
 へ、紅き蕾満てり、○此蕾を  
 り、取るべからば、○暫過ぐれ

ば、其蕾、皆開き、美しき花  
 となるのみあらざ、後よ  
 へ、實を結びて、其味甘き  
 果となればあり、  
 彼兒へ、牝雞を養へり、○  
 雞へ、穀物を、食むること  
 速なり、○これ、嚙むこと  
 なくして、食むるが故あ  
 り、然れども其穀物を、  
 腹は嚙く下ださざりて





第三

彼女ハ、鳥を捕へて、籠に入と置けり。○此鳥ハ、馴  
まじりや、又時として、噪き暴るゝことなり。

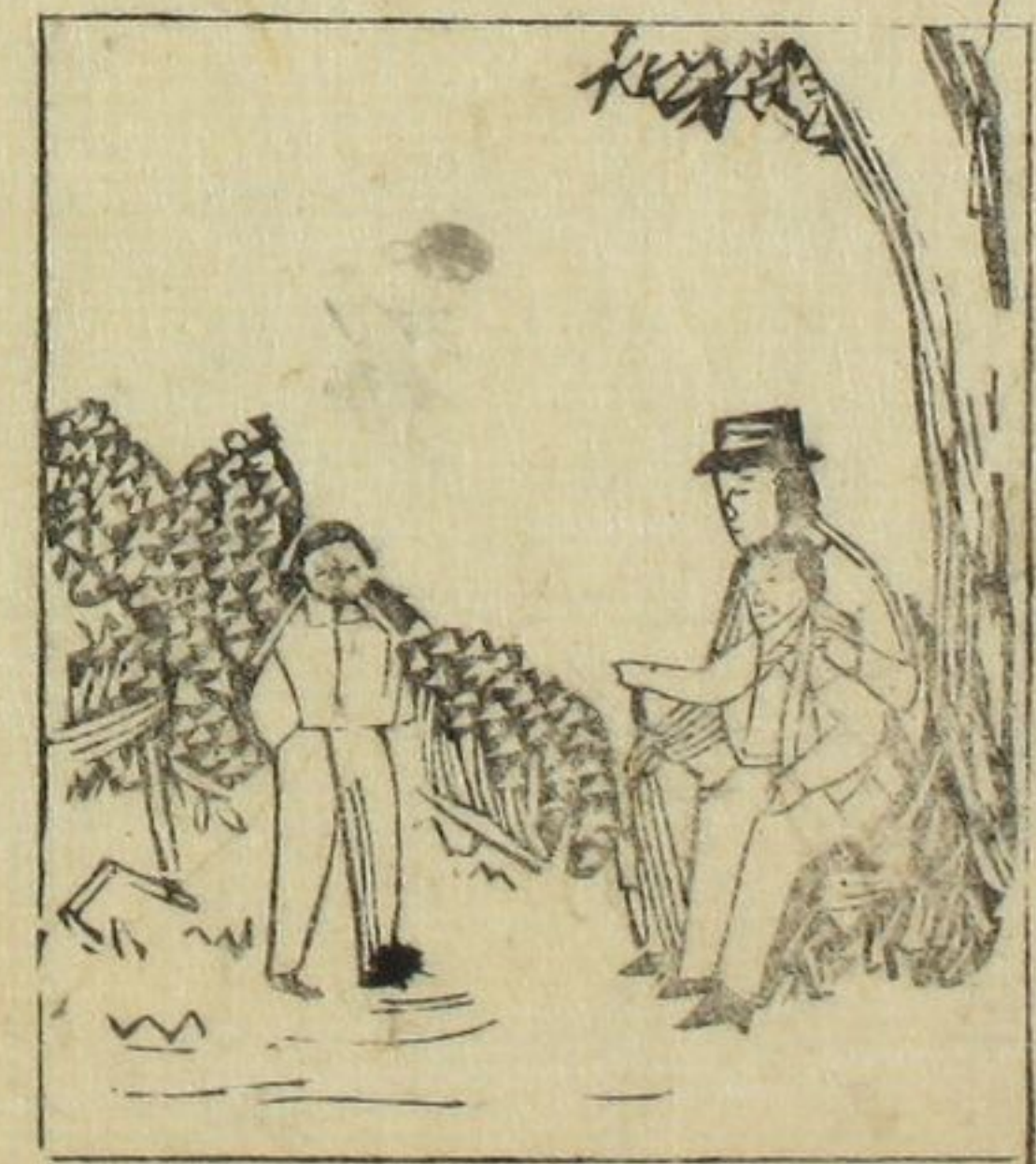
唯喉の下なる、袋み、入を置  
き、夜間、再吐き出どり、  
始めてこれを、腸中、噛み  
下どれものなり。



めり ○此鳥ハ、籠より出づること願へり。○  
若籠より出づるとも、再歸り来るべき、又其ま  
まに飛び去るゝ。○凡て鳥ハ、自由ニ山林ニ遊ぶ

や ○此鳥、今ハ、馴れど、  
ども、初をよ、暴るゝ  
○汝ハ、鳥の聲を、聞くと、  
とを、好む、又好まざ  
る、○吾ハ、鳥の聲を、聞  
くと、好むのみならず、  
又其形を見ることを好

くても好む故に、籠より出づることを願ひ一度  
 出づるに再歸り来ることをなす、  
 我を惡しき小兒と好まざ  
 りゆゑ、これを遠ざけんと  
 す。○惡しき小兒までも吾  
 へ、これと打ち傷くること  
 不し、然まども、共遊ぶこ  
 とをバ好まざるなり、  
 彼子ハ彼小女の爲に、親切ありや。○然り、彼子の  
 親切あることハ、小女の躓き倒まざる爲に、手を



ツ  
 全  
 小



ることなきを知りて、これを任せたるゆゑに、親  
 切に導きて、家ニ在ると、同トく、安全ありしむる

執り導くを見て、も知るへ  
 一○彼二人ハ道に迷ふべ  
 きなり。○否、彼子の、能く道を  
 知るゆゑに、一人として道  
 に迷ふことなし。○彼等ハ、  
 林の中を過ることを、恐る  
 るなり。○否、恐るることなし、  
 ○小女の母ハ、彼子の、恐る

わか

わか

あり、○若又家よ、歸らん  
しきるとききへ、自在よ、歸  
り得らるべし」

汝へ、杖を携へしる、老人  
を見たるう、○彼老人へ、  
路傍の石の上へ、息を、其  
手を杖の上へ、置けり、○

彼の顔と其白髪なるよ由りて年老たるを知り  
又年老たるよ由りて體の、屈みたるを知り、○  
何よ由りて、彼へ杖を、携ふるや、○老人へ、杖の為



よ歩行も、杖なくして、歩行し難し、○彼へ、年老と  
しどしと起つことと歩行をることと、得べし、然も



ども、急よ、走ること能は、時  
々、途上よ、休きて、息を續き、杖  
よ頼りて、徐よ、歩行するなり、  
爰よ五人あり、○汝へ此人の  
年老たるを、知しりや、○此人  
へ、白き鬚あるべ、老人あるべ  
し、○此人等へ、手よ、杖を持ち  
しる、老人と、同トく、年老たり

○然もども、其身ハ猶壯健あるゆゑ、杖ニ頼ら  
ざりて、自在ニ歩行することを得るなり



此笛ハ、管長くして、先キの、開きたる所のゆゑ、聲

彼等の持ちたる、笛の名をバ、  
何といふぞ、○此ハ、喇叭なり  
○彼等ハ、樂隊の、兵卒ゆゑ、  
此笛を吹くことを、鍛錬する  
なり、○此笛ハ、兵隊の、行列を、  
整ふる、合圖ニ用ゐ、又ハ祝日  
の、音樂ニ用ふるものなり、○

五上 三六

を發すること最大なり、

汝ハ、此人の、服紗の中ニ、あ

るものを書冊なりと思ふ

ナ、○否、これハ、卷物なり、○

然らバ、書冊の、次第を數ふ

るとき何故、卷一、卷二と

云ふや、○この唱ハ、漸、轉

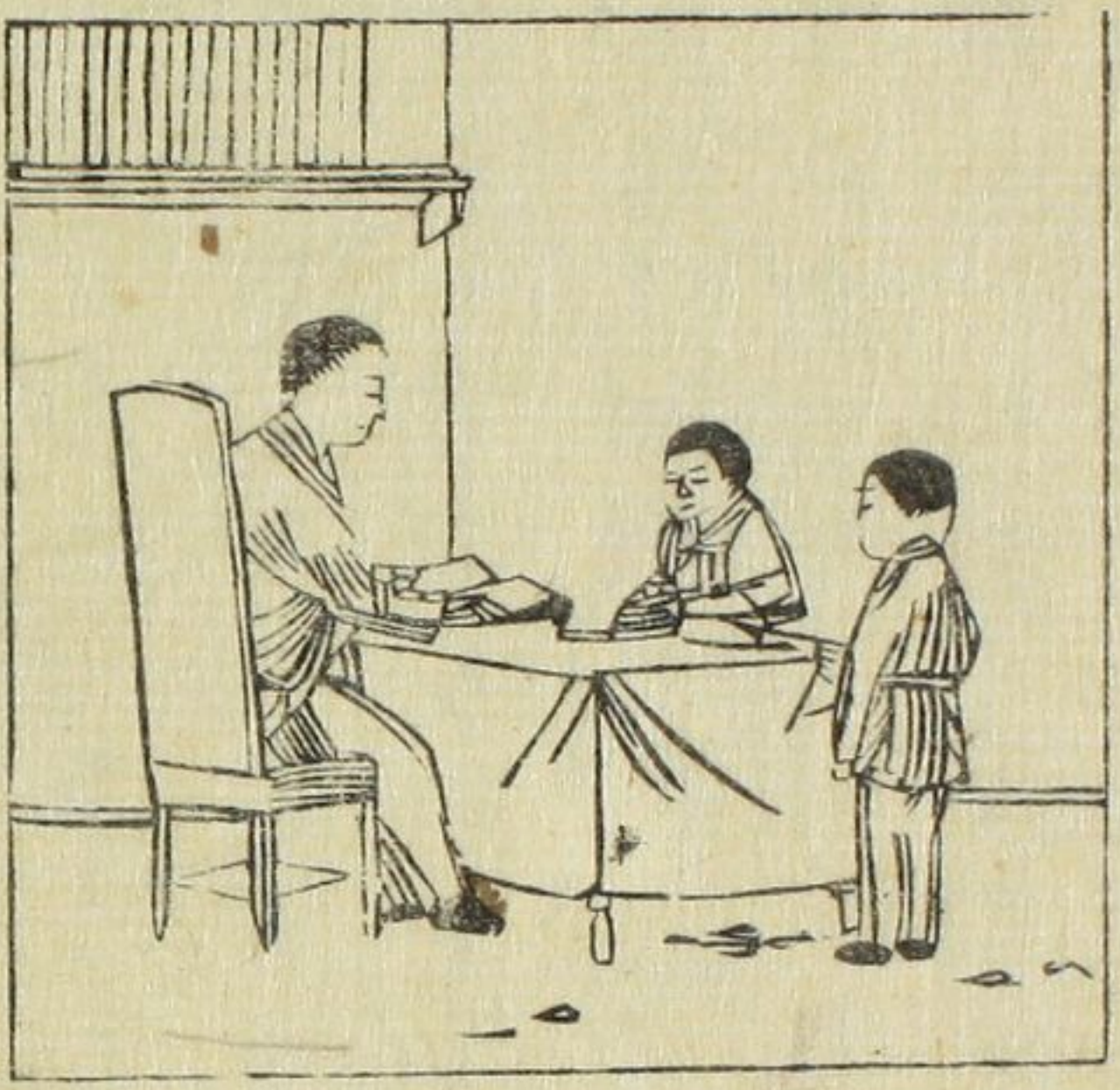
れるなり、古ハ、只卷物ニ

テ、書冊ならざるゆゑ、卷

一、卷二、と呼びたりと、其後、今の書冊、出来りて



も、猶昔の唱ふ浴がへるあり、  
良き老人ハ、我う好ま随ひて問ふ所を、教へ、又能

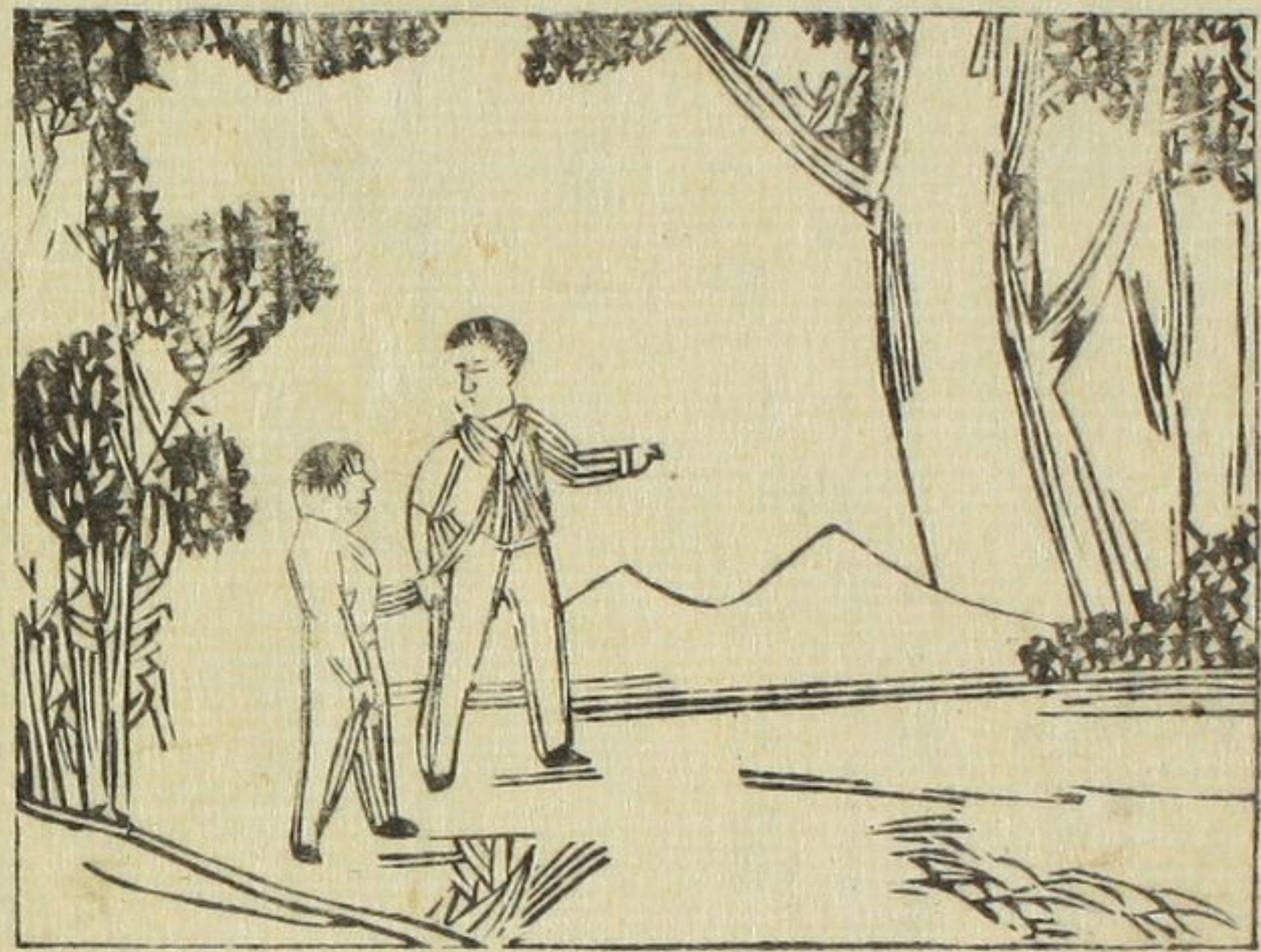


く小兒を愛するら、○然り、  
彼ハ小兒の、善きものを愛  
それども悪しき小兒をバ  
決して愛するることなし、○  
善き小兒なまバ、好きて何  
事とも、教ふるあり、

汝ハ、此女子を見たるら、○何故、其手を上げて  
とるや、○彼女子ハ、籠ニ鳥を、入き置きこれども

心を用ゐること深からざ  
る故、鳥を養ひ得ば彼籠  
と持と即其鳥逃去りて  
直ニ、林の中、飛び入りた  
るなり、○此とき驚きて手  
を舉ぐとも、再捕ふること  
能はざれハ、何の用も立  
つべからば、○彼の鳥を逃が  
し、吾ハ却て  
甚喜べり鳥ハ自由なること  
を好むものなり、





上は、遊ぶは、天然の性おればこれと捕へて、苦むるは、善きことよららば、

汝は、鳥の性と、知るや、  
鳥は、木に在ることと、好む  
て、巢を造り、卵を養育す、  
鶇鶇は、小鳥にて、棘の間、  
巢を営み、鶇鶇は、水鳥にて、  
水の邊に、巢を造るなり、  
かゝる鳥は、頭は毛冠あり、  
すべて諸鳥の林間又は、水

第四



此女子は、愛すべき人形と、持てり、これ等へ、遊ぶ  
は、宜しき具あり、必大切に、弄  
ぶべし、  
○人形を舞たは、とき  
は、静み動うして、戯るべから  
ば、  
母は、小兒に向ひて、何もの、人形を求めんと、或る  
やと、問ふ、小兒は、自好む所と、指し示せり、  
○此小兒は、人形のみと、弄びて、倦めるときは、  
何事をなれや、  
○毬を弄ぶことと、好むあるべし、





○此店又、列ねたる品り、皆小  
 兒の、好むものなきども、此小  
 兒の、静なる、娘ゆゑ、人形を  
 愛して、能く心を用ゐ、これと  
 損ひ毀ることあり、

梟の、終日、密樹の、枝をさう、夜  
 又入まば、始めて、飛び翔るな

り○此鳥の、眼力、甚強きゆゑ、晝  
 間ハ、却て物を、見ると、能はず、暗  
 夜又、明あること、人の、能く日中又、



物と、見るが如し

馬又、乗する、人あり○汝ハ、馬又、乗ることを好む

り、○我ハ、馬又、乗ることを、

好めり、然もども、彼の如く、

疾く走ることを好まざ、徐

又、歩まざることを好めり、

○此馬ハ、何故又、疾く走る

や、○馬ハ、彼又、鞭うたる

ゆゑ又、其痛日堪へざし、

疾く走るなり、

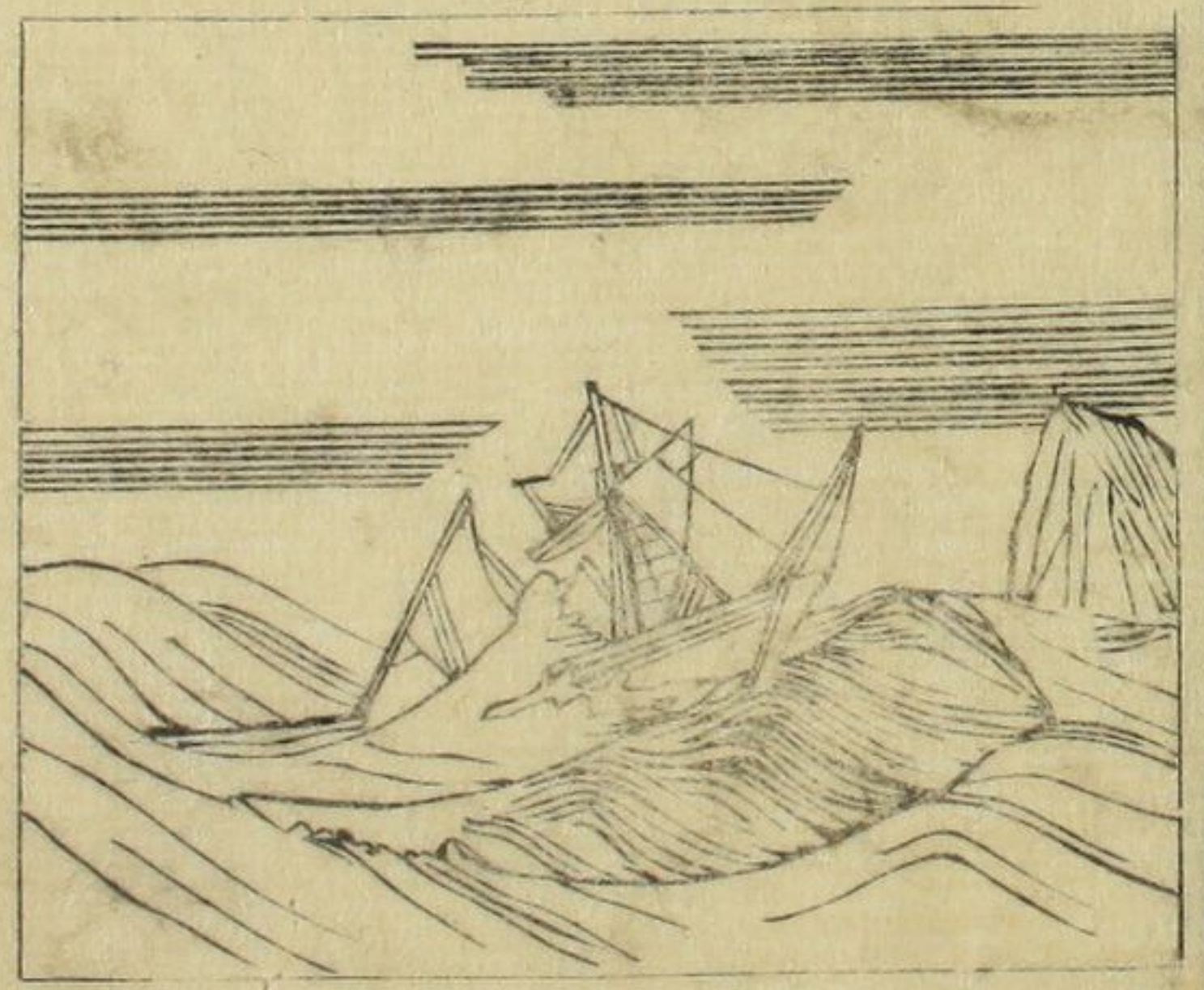


其 大 部 首

爰は小船と、大船あり、小船は二本の櫓あり、大船は三本の櫓あり、汝は、櫓の用と知りや、○櫓は、凡て帆と揚ぐる為と、設けたるあり、○汝は、海を渡るは、小船に乗ることを好むや、○風吹きて浪の立つ時、我は、船に乗りにて、海を渡ることを好まば、其覆らんことを、畏るゆゑなり、○これハ、蒸氣船ありや、○否、蒸氣船は、帆前船あり、



爰は暴風の日、海上は浮びたる船あり、櫓も、折れ、帆も、破きて甚危き状あり、○此船は、帆前船なり、トモ、蒸氣船なれば、斯る難し、罹ること少からん、○これハ、軍艦ありや、○否、商船なり、船の腹に、炮門ありきを見て、知るべし、此小兒は、幼年なるゆゑ、水の深き所に入ること能はず、○此小兒は、何をなさんとするや、○と





て、行かんとしてる状あり、○帽を、手も、持ちたる人  
へ、上著を著せしめて肘を見せり、これへ、この家

れへ、蓮の、小き葉と、大なる葉  
とを、採らんとしてるなり、○も  
し岸より、遠く離れて、行くと  
きへ、水も、漸深くなるゆゑも、  
歸ること、能はざるべし

一人の男へ、帽を被りて、左の  
手も、杖を持てり、○此人へ、此  
家の、主人も、今他所へ、出で

の僕もして、事を方へ、又、便あ  
るがゆゑあり、○僕へ、今主人  
の出で行きて、後にも、終日、空  
しく、暮ることを、欲せざして、  
其為を、べき事を、問ふところ  
なり、

人ありて、草を、積み上げ、り、  
此草の、乾きたるを、枯草と云  
ふ、○枯草へ、車も載せて、これ  
を馬も引らせ、直も  
小屋も運び入る、○草へ、枯  
きて乾くを待ち、速も





の、香を嗅ぎ、耳の、聲を聞き、口の、食を味ひ、又思ふことを言ひ、目の、物を見るものあり、○鼻と口と

小屋を運び入るべし、雨に遇ふ時は、再濡るものなきなり、○此枯草の、牛馬の、食となしべし、○馬の、枯草と麥とを、食せれども、其最好ものなり、麥を以



の、只一つ有りて、目と耳と、二つあり、○耳と目と、二つありて、口は、一つありて、見聞く如く、言語を多くせべからば、

○又人なり、二つの手と、二つの足とあきども、口は、只一つありて、業をば、多くせべし、

第五

鶴の、大なる鳥にして、雛の間は、其羽毛、茶色あき

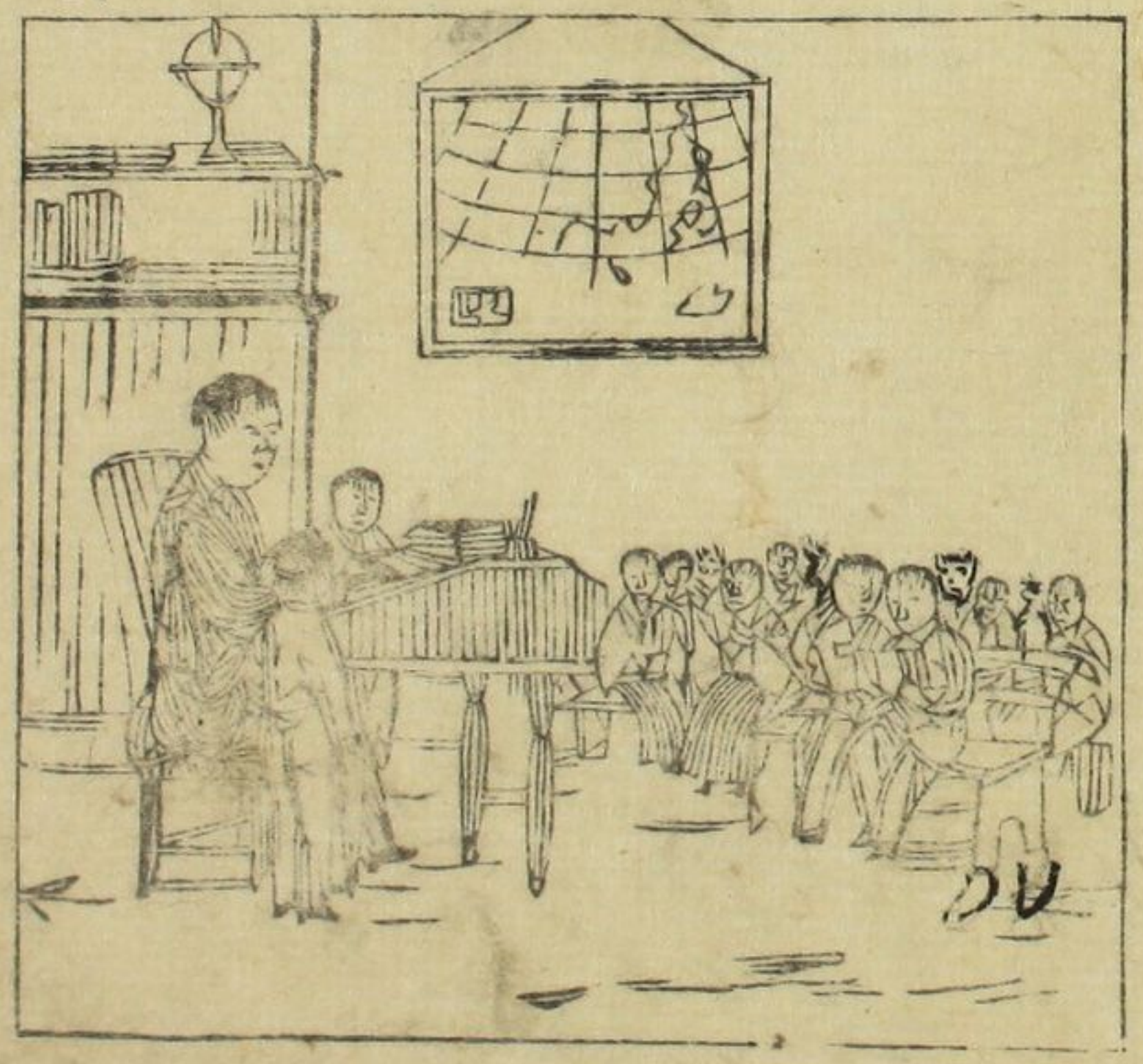
ども、生長して後、雪の如く白くなるあり、○こ



眠るゆゑをり、

の鳥は、長き頸にて、長  
き脛あり、○此鳥の、卵  
は、大にして、白きもの  
あり、○此類の鳥を、涉  
水鳥といへり、淺水を  
涉りて、魚蟲を食とふ  
せども、水上より浮ぶ  
ことなく、夜に樹上より

學校の教師入り来り、數多の男兒と、小女子と  
あり、○此小兒等へ皆  
書を讀み、字を習へり  
○校中より、石盤と、机  
と書籍とあり、○汝は、  
學校へ、行くことを、好  
むら、○汝は、書を讀み、  
又語を綴ることを、能  
くや、○吾は、書を讀  
むことを、好むども、未能く、讀むことを得ず、

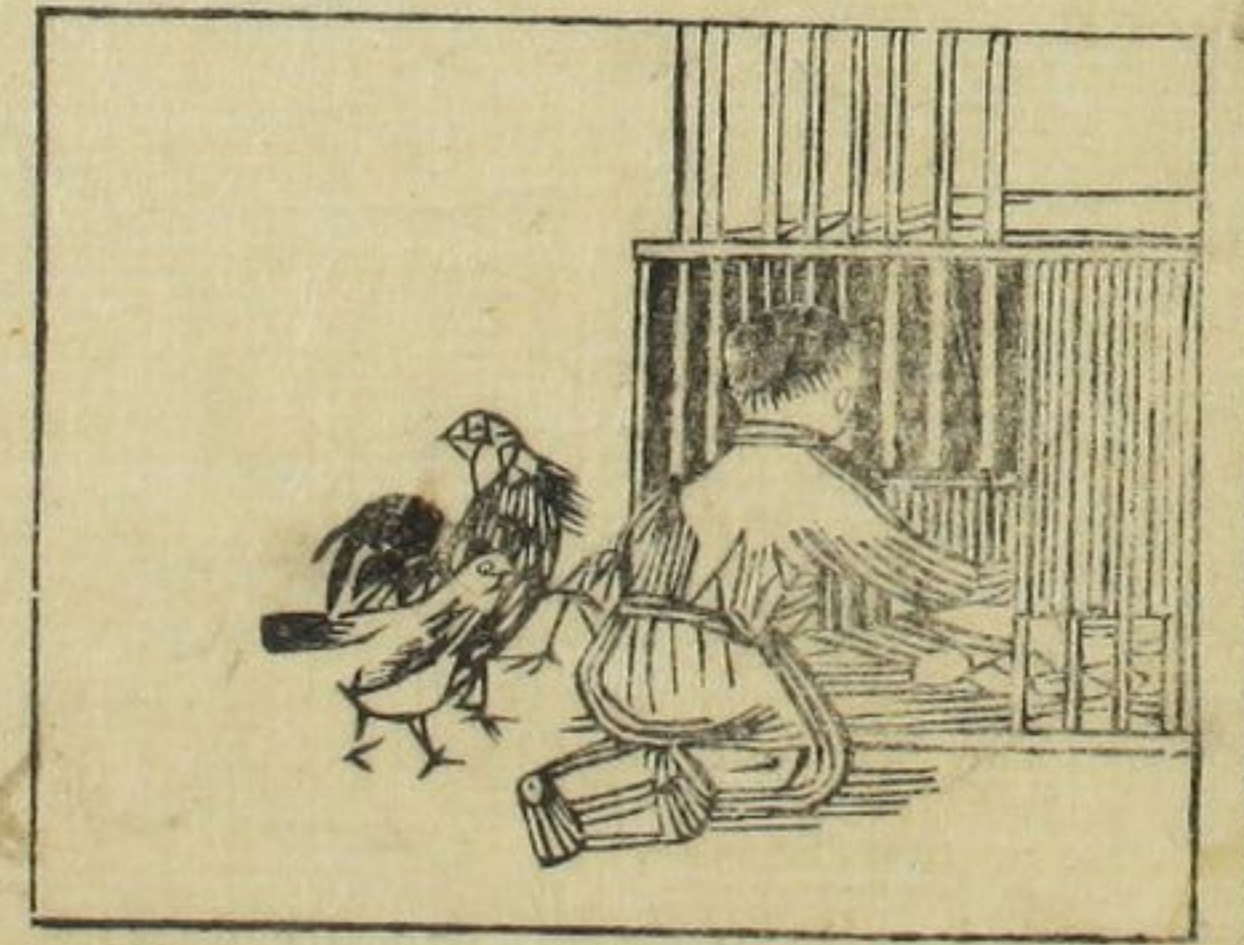




只遊歩場を於て遊ぶのみ

今日ハ、寒き日あり、○雪ハ、一様ニ地上ニ積もる  
リ、○小兒ハ、氷の上を滑  
べることを好む、○此遊  
ハ、甚危きものゆゑ能く、  
心を用ひざる、何となく  
らび、○もし、顛ひ倒る  
ことあらば、身を傷ふべ  
し、○賢き小兒ハ、かゝる  
危き遊を好むことなく

此兒ハ、手を伸べて、卵を取らん  
といひ、○巢の中より、數多の卵あ  
り、○こまハ、鶏の卵あり、○鶏ハ、  
巢の傍ニ在りて、飛び去らば、こ  
まハ、卵を取らるゝことを憂ふ  
るゆゑなり、○鶏の卵ハ、小ある  
ものと、大あるものと有るハ、其種類  
の、異あるゆ  
ゑあり

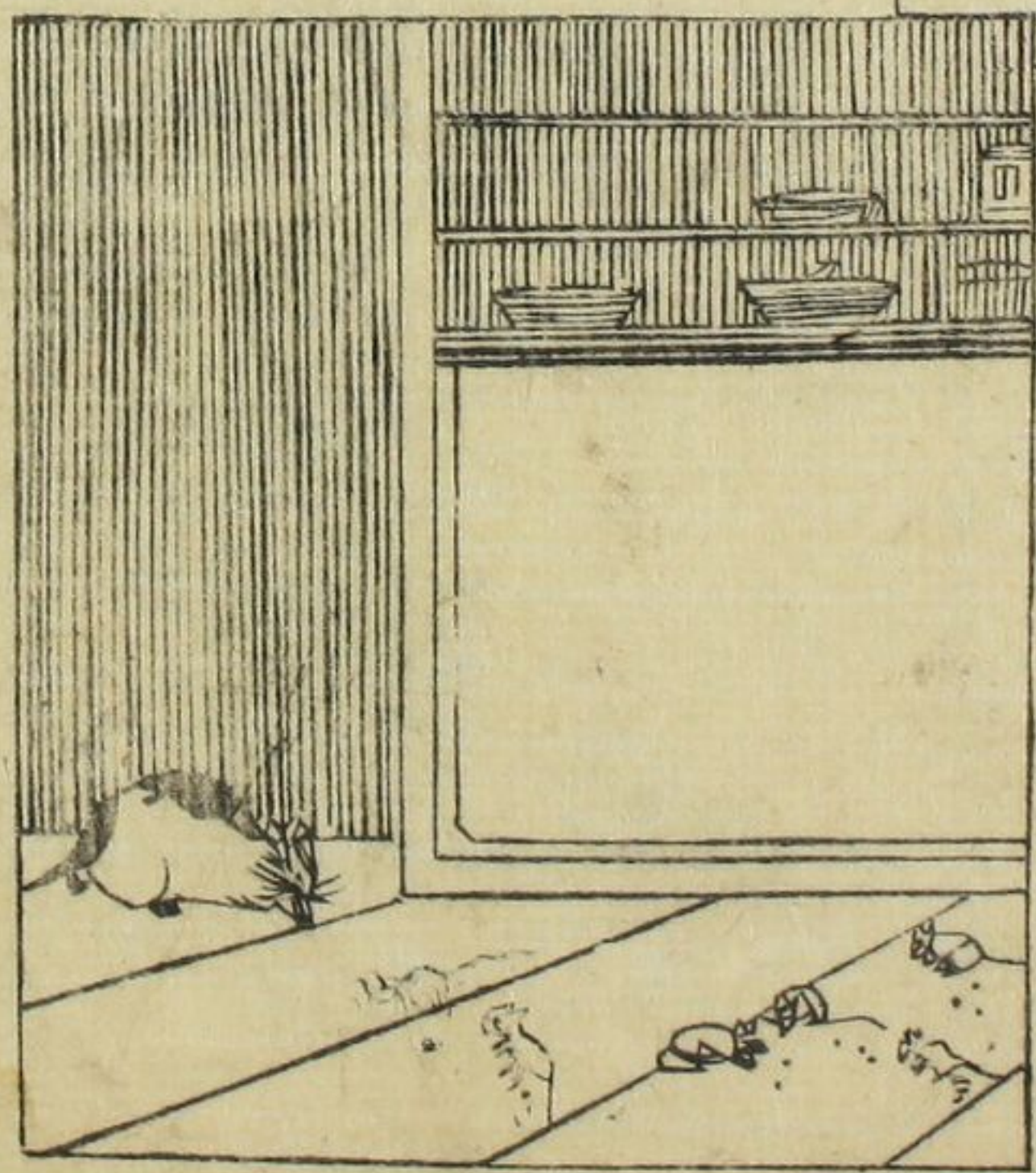


瞿麥と、桔梗との花あり、○小兒ハ、桔梗の花を採  
り、娘ハ、瞿麥の花を手ニ持てり、○瞿麥の花ハ、多



数多の鼠あり、鼠ハ、日中  
 又、出づることあり、○夜  
 半又至りて、各出づ、遊  
 ぶ、○此出づ、遊ぶと  
 きハ、深を行き、棚又登り、

く紅色なり、○桔梗の  
 花ハ、紺色あり、瞿麥ハ、  
 多種あまども、概夏又、  
 花を開くあり、



厨又入りて食類を、竊り食り、○然もども猫の聲  
 を聞くとき、驚きて、一時又、静まり、忽穴の中へ、



逃げ入るなり、○故又  
 猫の居る處又ハ、出て  
 遊ぶことなり、  
 爰又、馬車なりて、数多  
 の小兒と女子とを載  
 せたり、○汝え、此小兒  
 と女子とを、知まらば、  
 ○これを知れり、○こ

れハ皆我學校ニ来る人あり、○彼の犬ハ馬と同  
 トク、走まり、○彼等ハ汝を見たりや、○彼の、吾を  
 見るときハ必其帽を脱ぐ、故ニ我も亦其時ニハ  
 帽を脱ぐざることなり、

この箱の中ニ響あり、○汝  
 ハ此響を、何ナリと思ふや、  
 ○此箱の中ニ、あるハ、鼠  
 ラぞハ猫なるべし、汝ハ、何  
 ナリと思ふや、○この響甚  
 小なるゆゑニ、吾ハ小き鼠



なりと思へり、○凡て響ハ其物ニ應トて、度ニ過  
 ぎざるものなれば、猫も、鼠も、以大なる鼠も



何ぞぞと思へり、  
 爰ニ四人の小兒、何リニ人  
 々坐して二人ハ、立てり、○  
 一人の老人ありて、此小兒  
 等ニ神の話を説き聞けき  
 んとす、○老人云ふ凡て人  
 々神を敬して我身の幸を  
 願ふと、なすハ善き道を



行ふべし。○善き心を持ちて善き道を行ふんことを欲せば、小兒の時より學問を勤むべし。○學問して壯年に至り、毫も過なきとき、自神の助と得べし。

爰は杖を携へたる老人は、り足も不自由なく、目も、矇くたれり。然るども、此老人も、初は小兒なり。今の汝等の如く、疾く走り、まこと遊び戯れしなり。○今は足も顛



えりしゆゑ、小兒の肩に倚りて立てり。○見よ、此老人は、これを一年又譬ふれば、冬の時候の至るなり。○汝等も、冬の時候又、至らざる前、學問を勤めて、世間の利益を考へ、出どき、春の萬物を生長せらるが如く、せむいけるべからば、爰は槐の大木なり。○汝は此木の年を経る、數を知らんことを欲せば、横に切り、て木理の輪を數へ見らるべし。○木理の輪は、



木理の輪は、

年毎、一つの外の、生ぜざるものなれば、輪の數  
 まで、其經とる年の數を知らず、なり。○木理の  
 輪ハ大概、木の心より、増もものなれども希は、  
 外面より、増もものなり。



汝等毎朝早く起きて、神を拜  
 し、先、今朝まで、無難又、過ぎと  
 るも、神の賜あり、かく夜明く  
 る毎、日光を給ふより、  
 父母の、恙なき顔を見ること  
 を得るも、皆其恩ありと、謝を

べし。○さて其後、吾を導きて、幸を與へ、必過無  
 くらあめん、てとを折るべし。

第六

此人等ハ、小舟に乗り、網  
 を以て、魚を捕り、海濱に  
 歸まるなり。○網を海上  
 又、引きて、魚を捕ふると  
 きハ、鱗あるも、鱗なきも、  
 大なるも、小なるも、同ト  
 く、其中、又、入りざるもの



あし、○汝ハ此處ニ居る、三人の男を見たりや、○  
 又彼等の捕へたる、數多の魚を見んや、○海中の  
 魚ハ其種類、多くして、大なるものも、小なるもの  
 と良きものと良からぬものとあり、○一人の男  
 を、小舟にて良からざる、魚を、取りて、海中へ、投  
 げ入まくり、○一人ハ、大なる、魚を籠又、入るゝ所  
 あり、○入きたる、魚の此籠ニ満ちたるときハ、我  
 が家ニ持ち歸るなり  
 此地を、何如ある處と思ふぞ、○花園あり、○此處  
 又、數多の、美しき花あり、○左の手又、鋏を持ち、右



花を折り、又果を取るべし、とぞ

の手ニ帽を持ちたる小兒  
 あり、小兒の後ニ杖を持ち  
 たる娘あり、○汝ハ、此園を、  
 此小兒と娘との為ニ設け  
 たる所ありと思ふ、○又  
 この小兒等を喜びて遊ぶ  
 と思ふ、○一人の娘ハ、瓜  
 を入まくり籠を持ち、○  
 汝ハ、花園ニ遊ぶとき、漫々

爰又、果を摘み入まると、籠  
 り○この果は、葡萄と梨子  
 久○籠の外は掛りたるは、葡  
 萄の蔓あり、○其影は籠の左  
 又、在り然まは、大陽は何きの  
 方より来りといふことを、知れ  
 りや、○大陽は、籠の右より来り

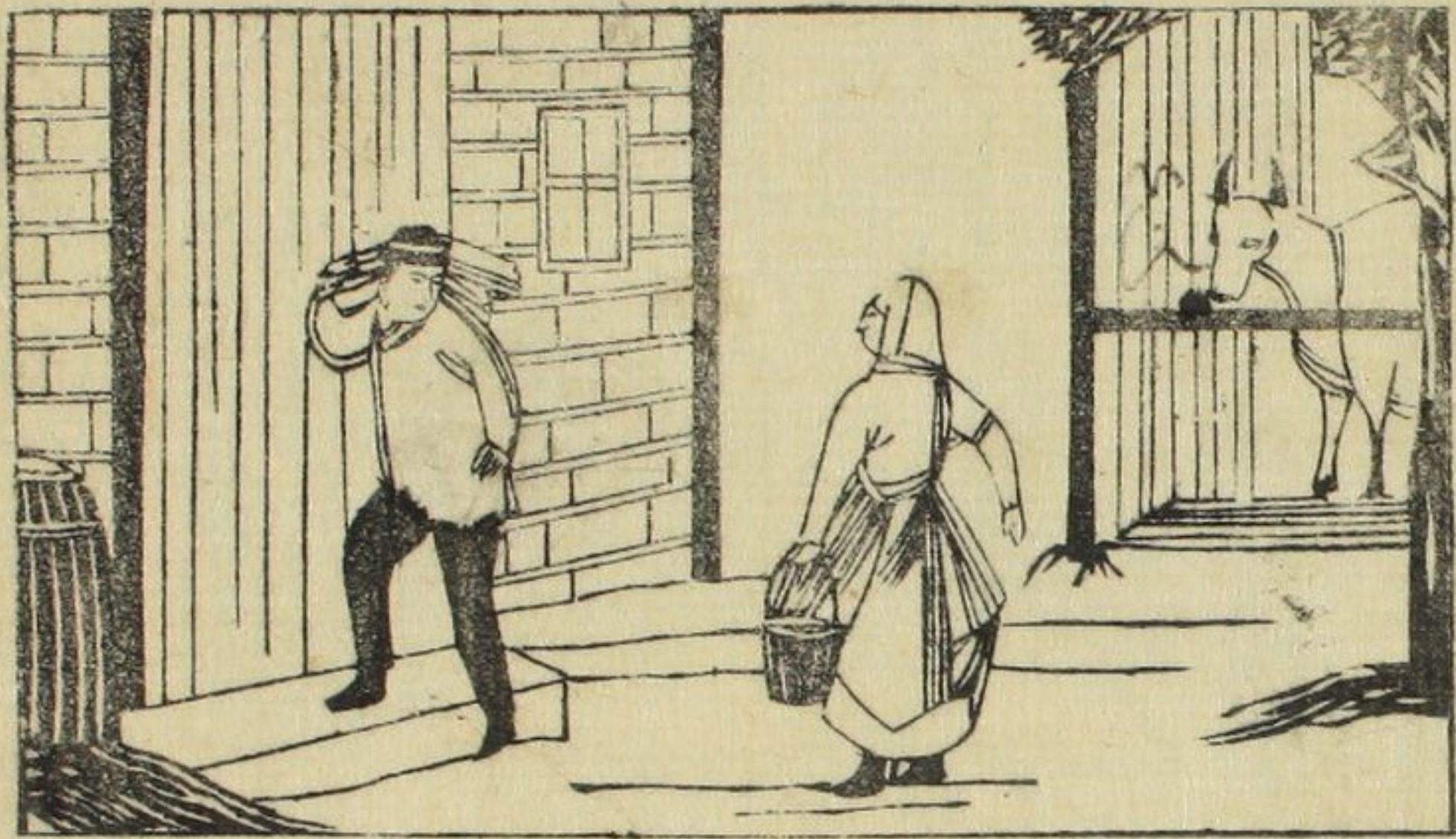


此畫ハ日の出の、景色なり、○今日ハ、晴まると、天  
 氣ゆゑ又啼く鳥ハ木より木へ、飛び遷る、○草ハ  
 青々として葉又露を帯とり、○數多の農夫は、野



陽の照らひ處へ、甚熱し、然まども、梅の蔭へ、較涼

又出て、或ハ畠を耕し、或  
 ハ草を芟まじ、○農夫ハ晴  
 まると、日又ハ、必野に出で  
 て、働くものと、知るべし、  
 晴天又、働うざれハ、霖雨  
 又、遇ふとき耕まことを得  
 ばして、穀菜を得ることな  
 今ハ、日中よりなりたり、○大

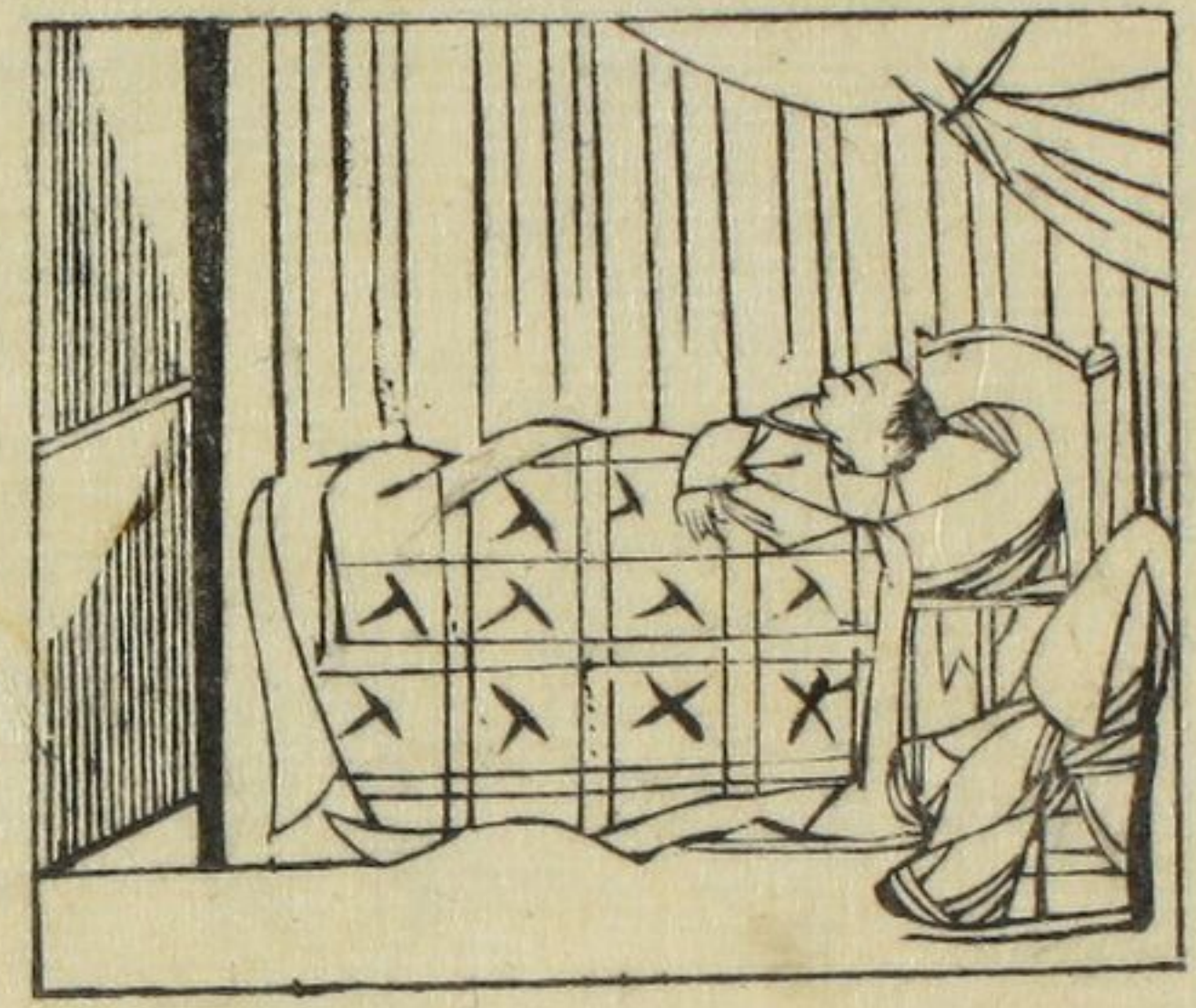


久、○一人の女ハ、庭ニ出で  
 て、牛の乳を、舞久桶ニ、満と  
 しめてこれを牛酪ニ、製せ  
 んとい、○此時男子ハ晝間、  
 変りたる草を、積み又干し  
 置ける、藪を、収めんら為し、  
 極めて、忙し、今日ハ一務を  
 果さざるるときは明日の業  
 又、妨阿るガゆゑあり、  
 神ハ、常ニ我を守るゆゑ、

一きゆゑ、臥したる牛と、  
 立ちたる牛あり○又一匹  
 の牛ハ、熱さを、消せんが為  
 し、河ニ行きて水を飲まん  
 とす、○河の上ニ、橋あり○  
 人々日中ニあり、とるゆゑ  
 皆、晝飯を食をる為し、家ニ  
 歸れり  
 日暮ニたりた久○人ハ野  
 より歸り来り、牛を庭ニ、



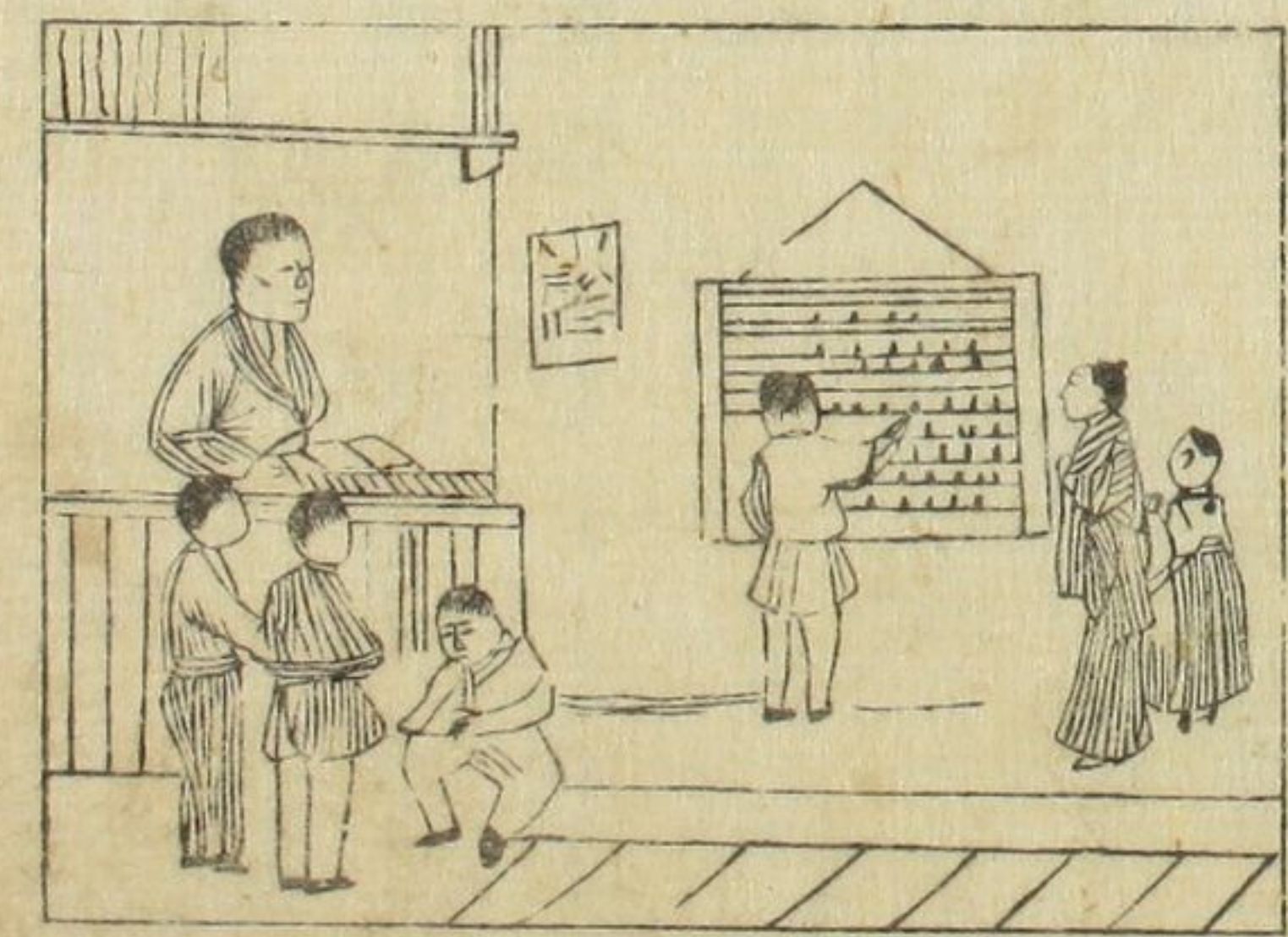
吾を獨りして、暗夜も、歩行するをも、恐るることな



一〇又、眠りたるるときは神の、守りあるゆゑに暗き所も恐るることなし、〇神の暗き所も、明く見るものゆゑ、人の知らざる所と思ひて假よる惡しきことをなせば、忽罰を蒙ふるあり、〇人の、知らざることをも、神も、能く知るゆゑに、善きものよへ、幸を與へ、惡しきものよへ、禍を與ふるなり、

第七

汝へ、物を數へ得るなり、〇父も一、汝も、十一の、林檎を、與へて、母も、まゝ五の、林檎を、與へ、るときは、幾箇の、林檎を、得たりと思ふや、〇十六の、林檎あり、〇然り、汝等を物を數ふることを、學ぶべし、〇大なる數と、小き數とを、知るべし、〇汝も、石盤、又へ、紙に、數字を、書得るなり、〇も、數字を

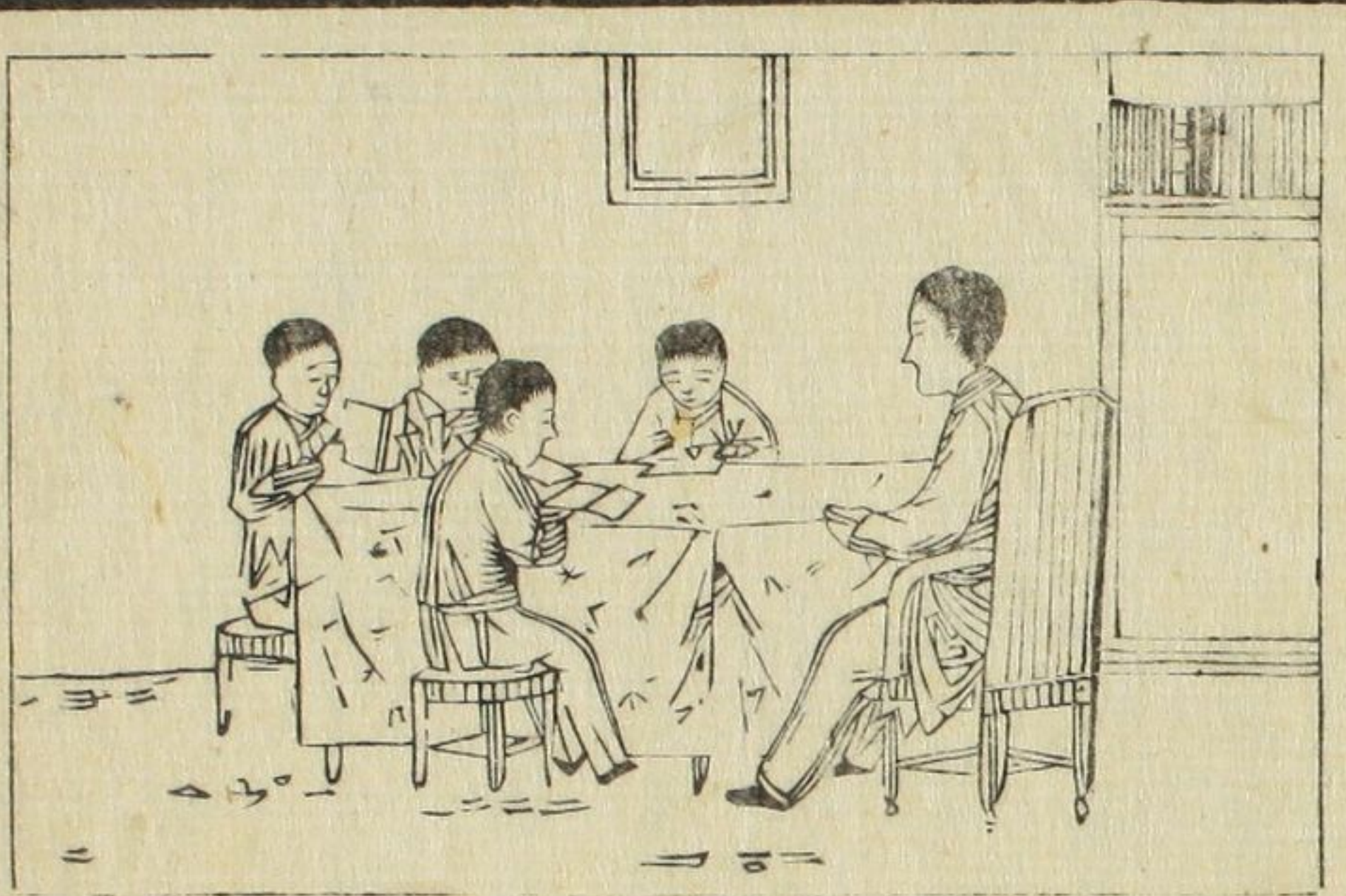
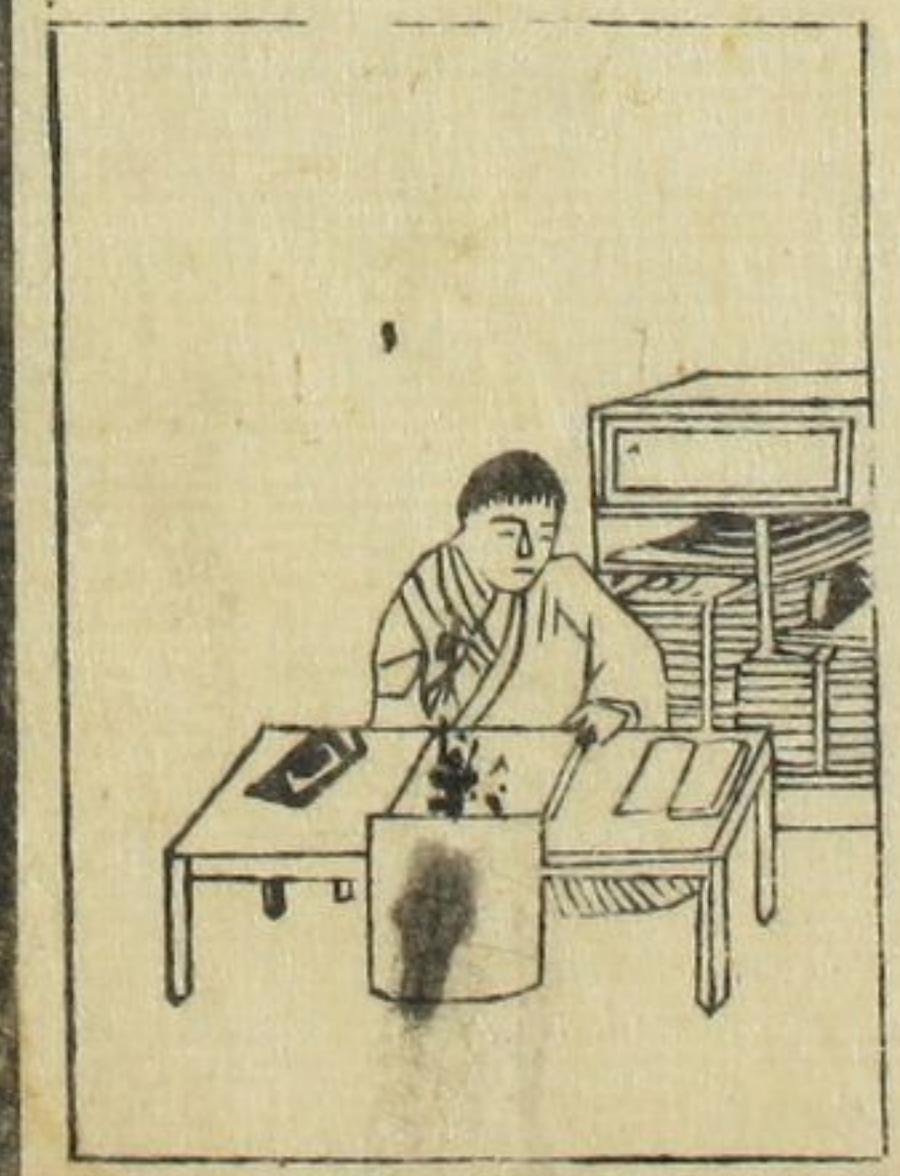


書き得ざらば務めて、これを、書くことを學ぶべし  
○物の數を、知らざるを愚人なり、



盆の上は、十一の梨あり、この中、  
母は、三持ち去まり然らば残り  
たる梨子へ、幾箇とふまりや○  
残りたるは、八ふり

汝等へ、文字を、書くことを學ぶべし、  
汝等へ、文字を、讀み得るを、  
○文字を、讀むことを、知ら  
ざれば、人より、贈りたる、書  
状をも、讀むこと能たば、○  
又書籍を、讀み得ざる時  
ハ、事を、知ることを、能たば、○  
事を、知らざる人へ、縦才の  
りと雖、用ゑ、適せざるあ  
り○ゆゑ、文字を、讀むこ



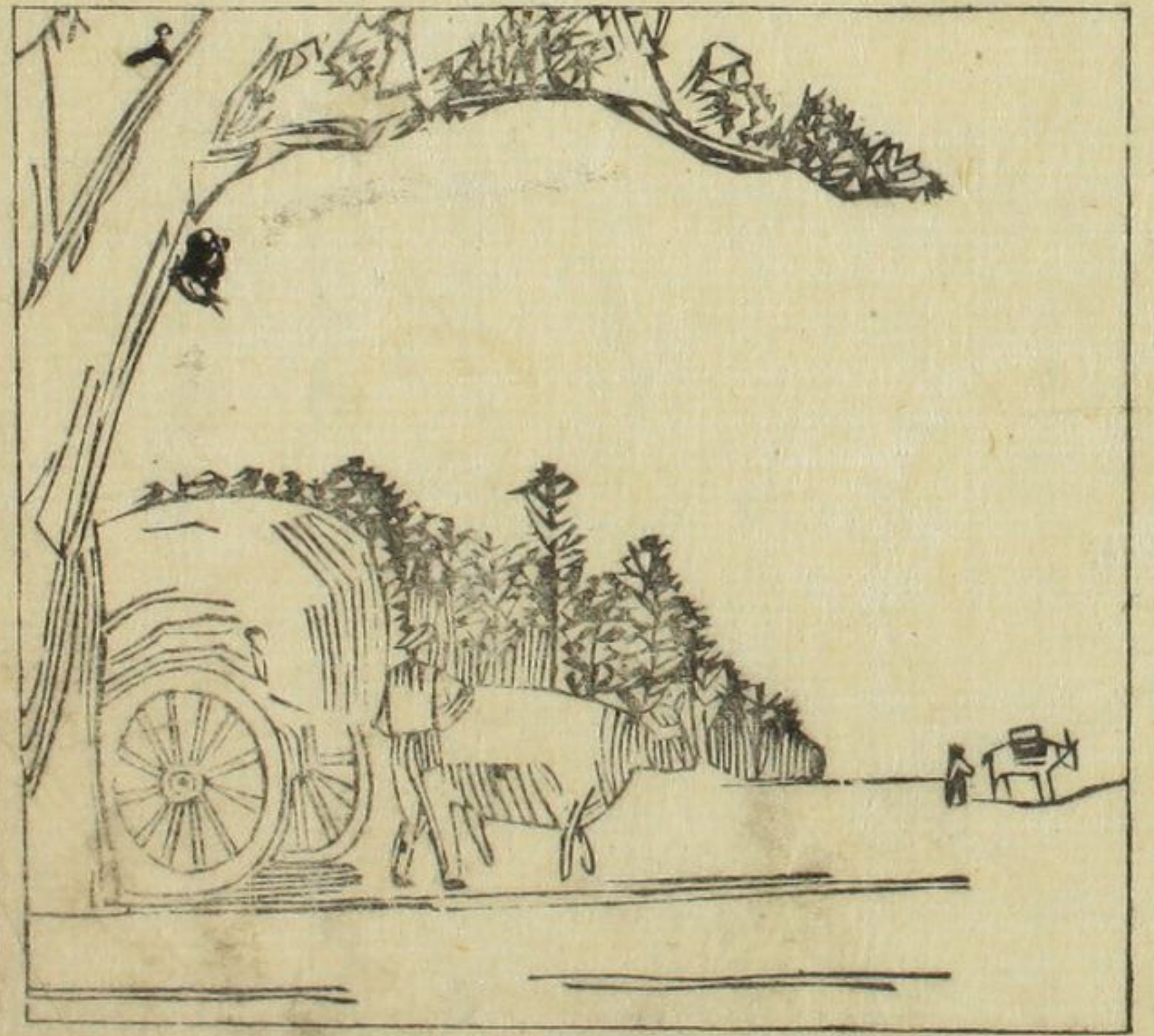
汝等へ、文字を、書くことを學ぶべし、  
汝等へ、文字を、讀み得るを、  
○文字を、讀むことを、知ら  
ざれば、人より、贈りたる、書  
状をも、讀むこと能たば、○  
又書籍を、讀み得ざる時  
ハ、事を、知ることを、能たば、○  
事を、知らざる人へ、縦才の  
りと雖、用ゑ、適せざるあ  
り○ゆゑ、文字を、讀むこ

とを知らざる者を、同トク、愚人といふなり。○さ  
 れば、汝等へ、務めて、文字を讀むことを、學ぶべし。  
 馬ハ、實用ニ適き、畜類  
 あり、陸地ニ於て、荷物を運  
 ぶ、馬無くてハ、不便なり。  
 ○馬ハ、畜類ノ、大なるもの  
 して、顔、長く、鬣、りり。○背の  
 上ニ、荷を負ひて、速きニ、輸  
 るもあり、人を載せて、速ニ、  
 走るもあり、又車を引くも



なるあり

牛も、馬と同トク、實用ニ便なる畜類ニして、能く  
 車を引き、又ハ、荷を負  
 いて、速きニ、輸るもの  
 あり。○されども、牛ハ、  
 人を乗せて、走ることに  
 能はず。○牛の肉ハ、食  
 物とありて、能く滋養  
 をなり、又牝牛よりハ、  
 乳汁を、擧り取ること





を得るなり

汝の著るる衣服ハ何といふ織物ありや○上衣

ハ糸織ニテ羽織ハ

黒羅紗なり○汝ハ絹

ト木綿ト羅紗の中ニ

何モウ尤暖なるもの

ト思ふや○羅紗ハ毛

織ニシバ第一ニ暖ナ

リ其次を木綿ト以絹

モ又其次ナリ



爰ニ白キ單衣ト紺色の單衣ナリ○汝ハ何を

暖ナリト思ふや○白キ

色の太陽の熱を引くこ

ト少キゆゑニ夏の涼

ト雖冬の寒ト紺色の

太陽の熱通ヒ易キゆゑ

ニ冬の暖ナリト雖夏の

暑ト○人々夏の多く白

衣を着冬ニ多く紺色の

衣裳を着るハこの理ニよりてなり

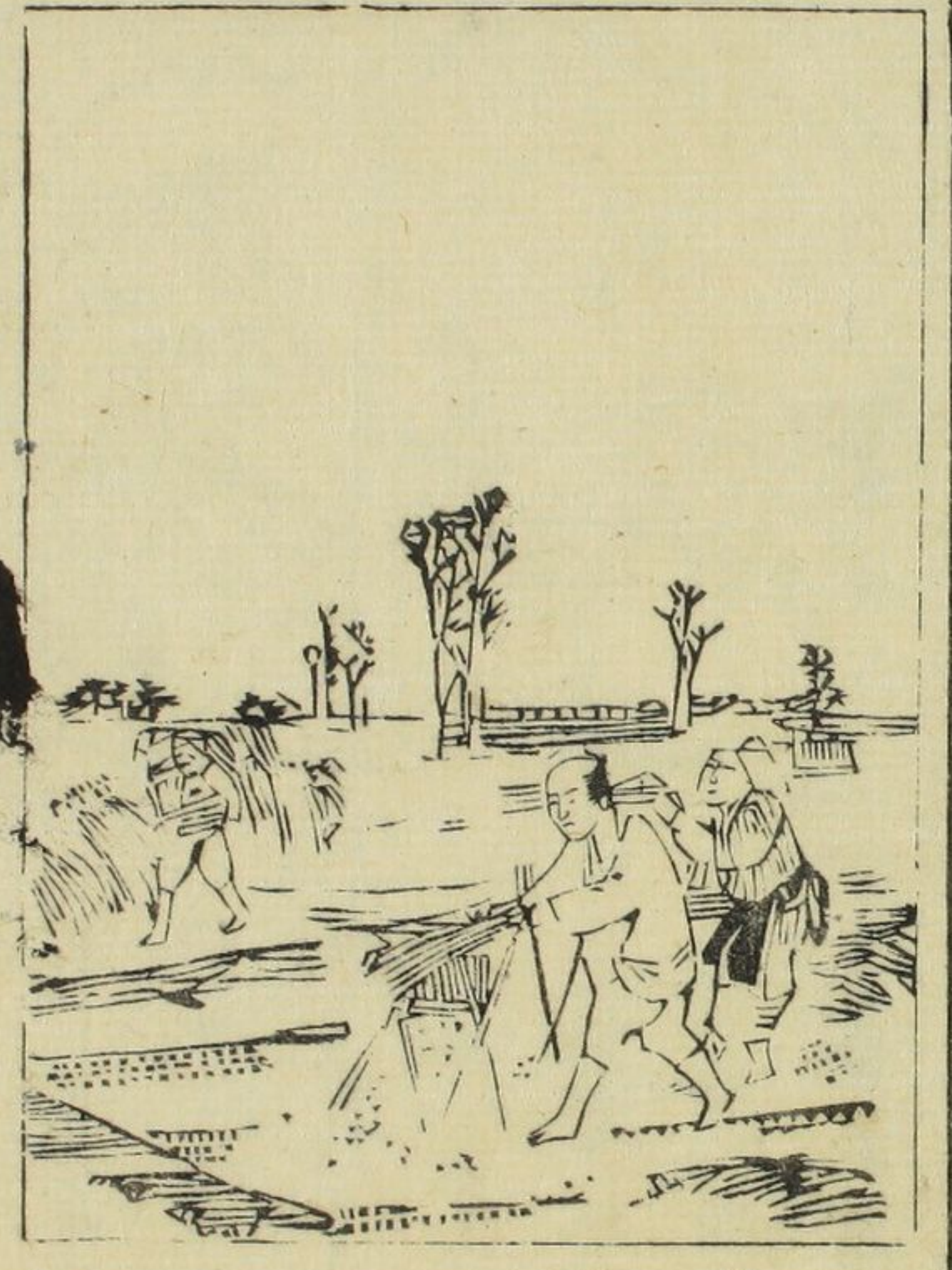




爰又二枚の圖あり皆人の働く状を畫けり○初  
の圖ハ田ノ下  
たりて秧を植  
るところあり  
○この人の肘  
も脛も露をせ  
りられ働くは  
便なるがゆゑ

なり

次の圖ハ稻を刈りて我家へ持ち歸る所なり○



又稻を拵きて  
米を取る所を  
見るべし○此  
人々の衣ハ汗  
も濡ひて乾く  
ときあり○農  
夫ハ此の如く

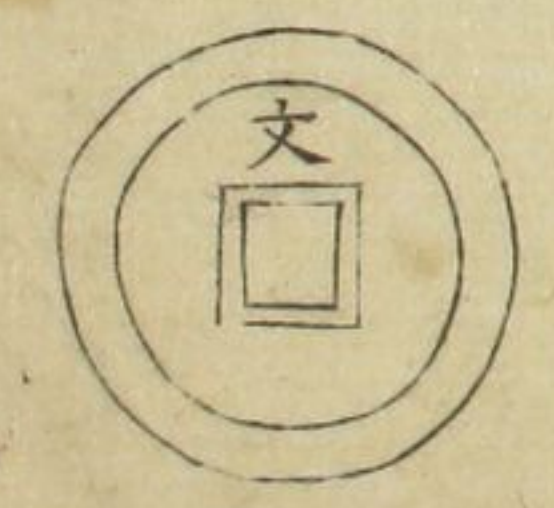
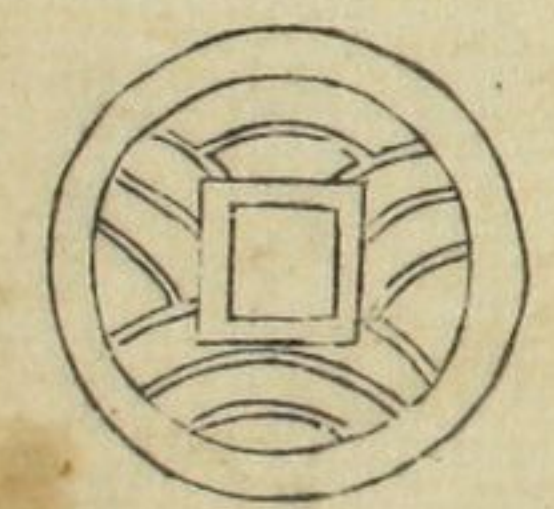
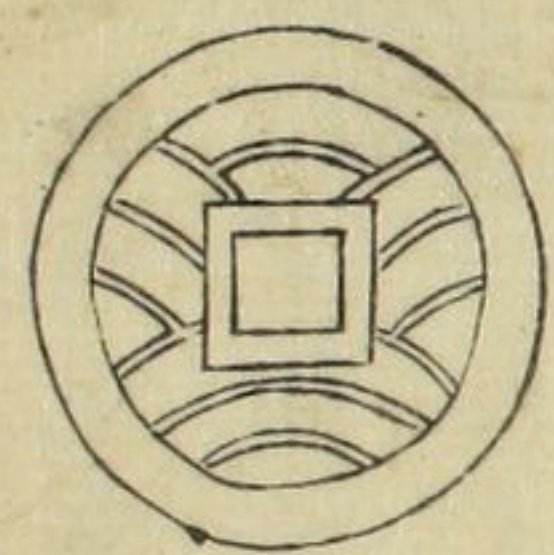
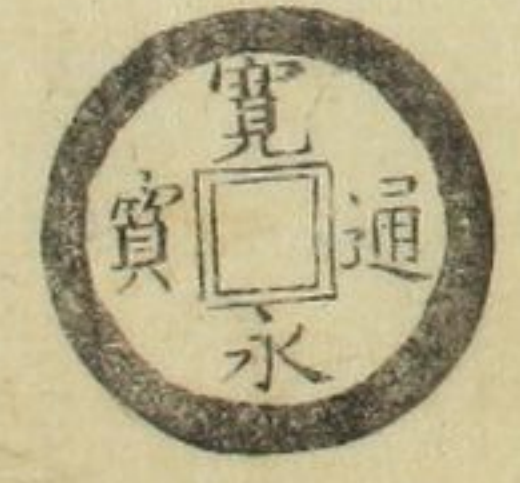
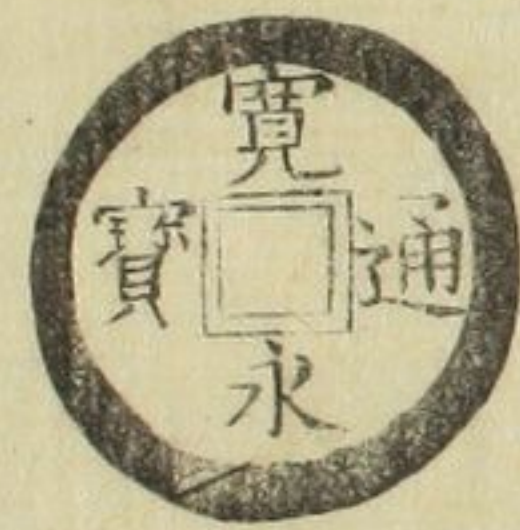
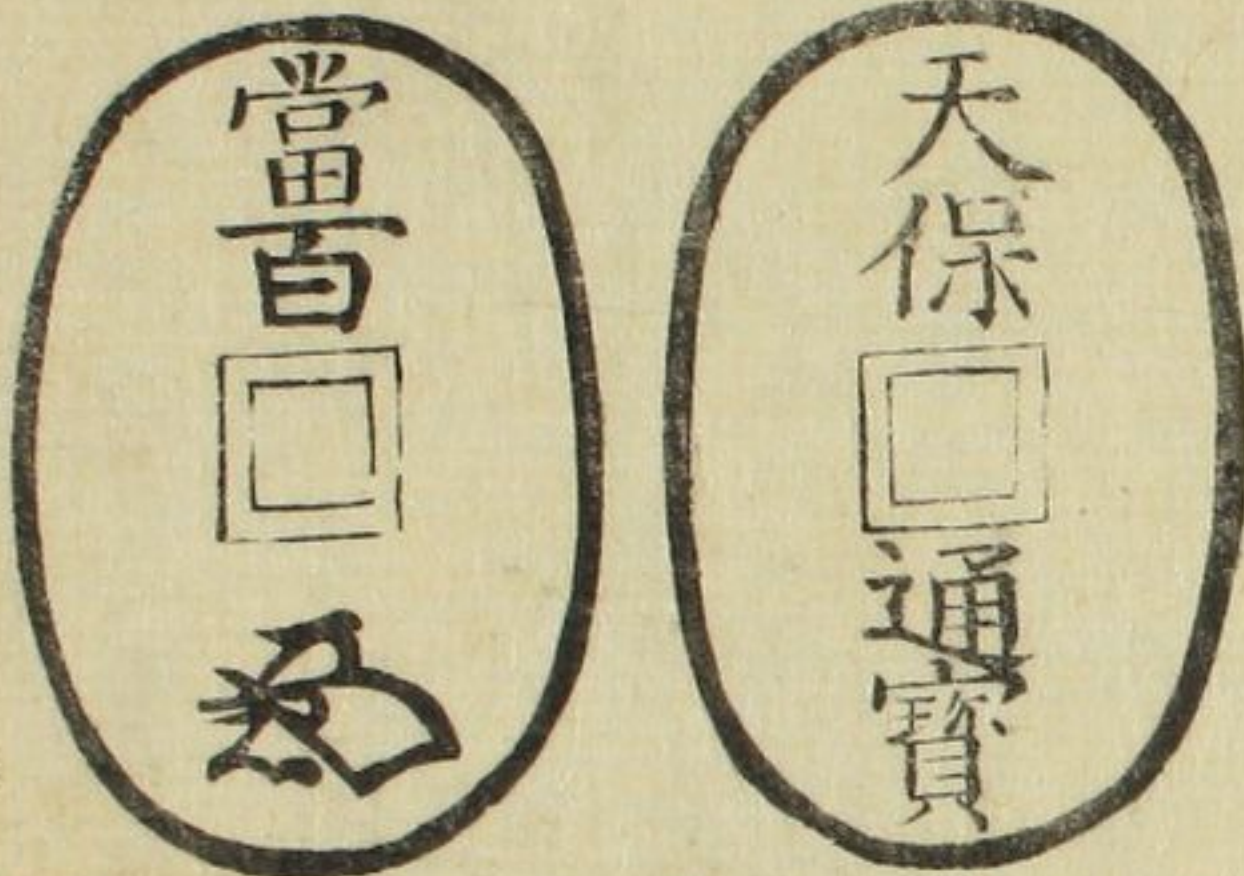
働けざれば穀物を得るとなり○汝等穀物を  
食する毎に農夫の苦勞を想ひ粒々皆辛苦より  
出てくるを知りて其業を怠るべからば

これハ、蠶を養ヒ、絲を繅ス所ナリ。○數多の女、皆

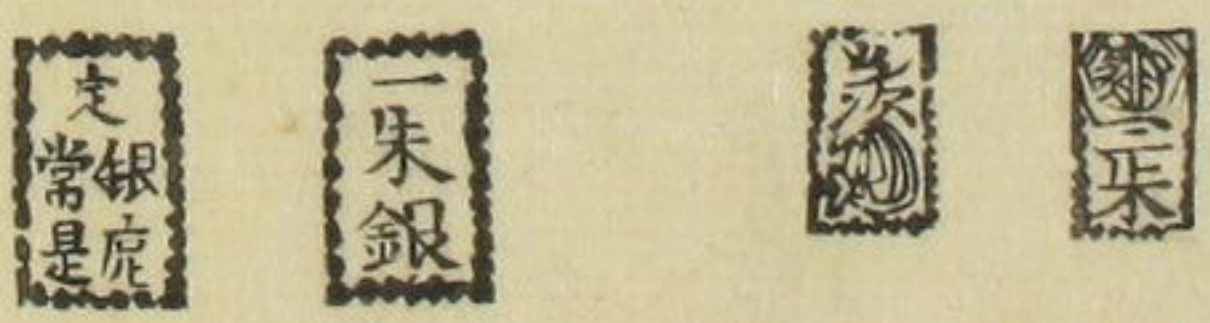
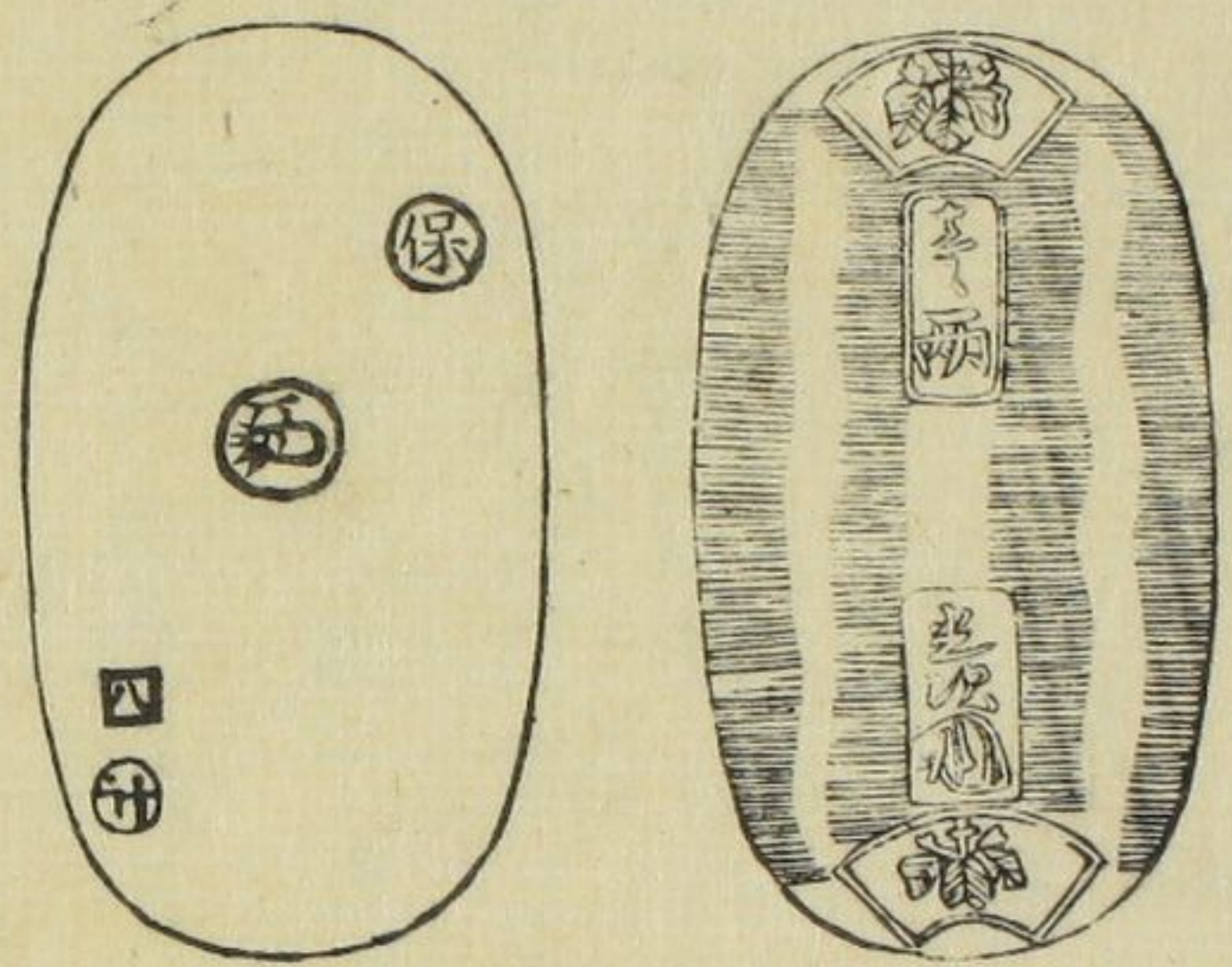


朝早く起き、夜中まで  
眠らざりて、髪も結たず  
日々息も間なく働けり  
○又二人の男あり桑を  
採る所あり○此男は野  
に出づ、耕す人と、同  
く、肘も脛も露れ、力  
を盡して、働けり○此の如  
く、數多の男女の苦勞

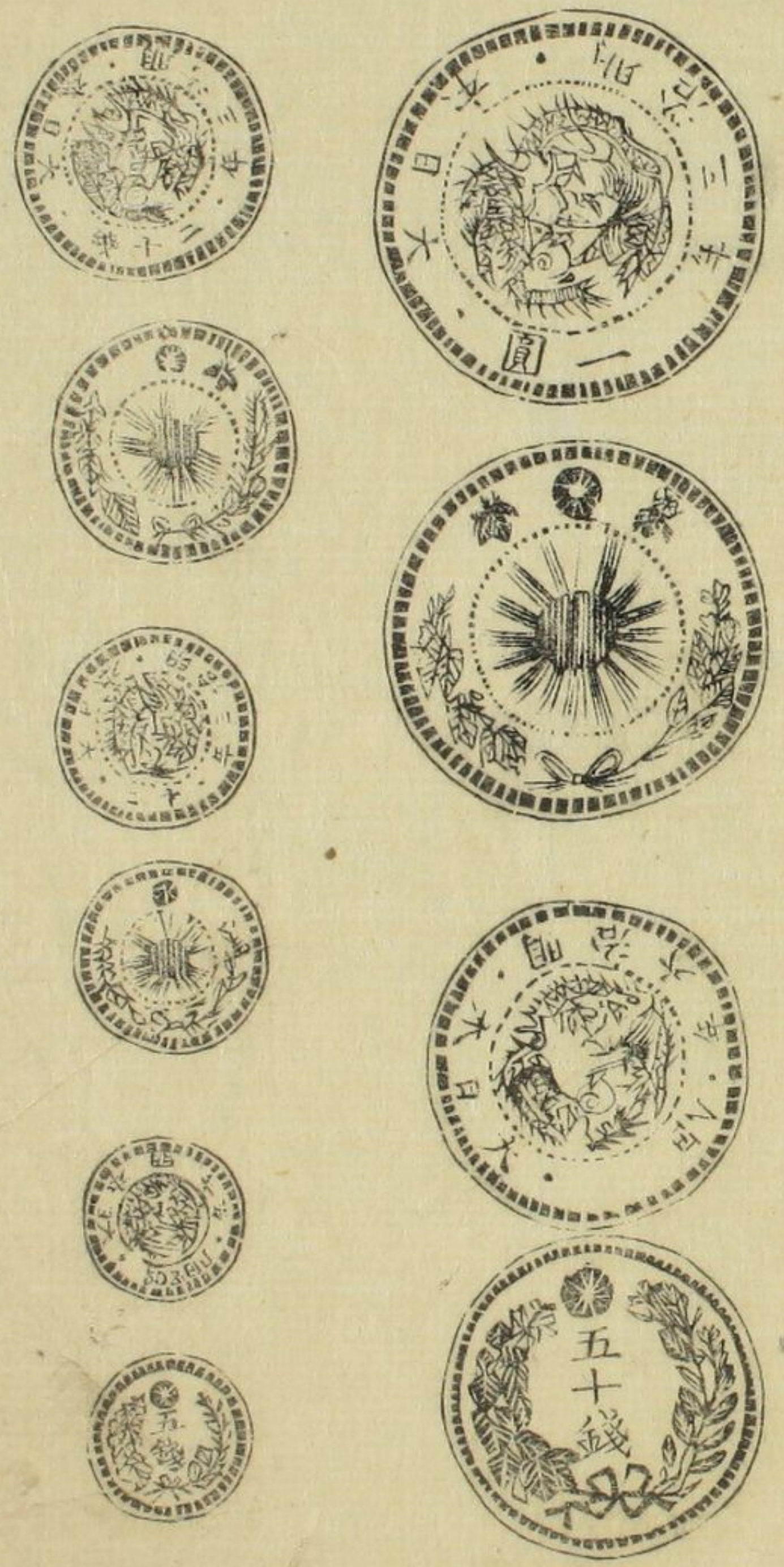
て、製するも、非ざれば、糸も生ぜず、絹も得ること  
能え、○汝等暖なる衣を著たるとき、よハ必蠶  
を養ひ、絲を取る人々の苦勞を、忘るべからず、  
爰も種々の貨幣あり、



右四品の貨幣を、錢とつゝ、幕府政を執るときより、今日までも、通用するもの、是なり。

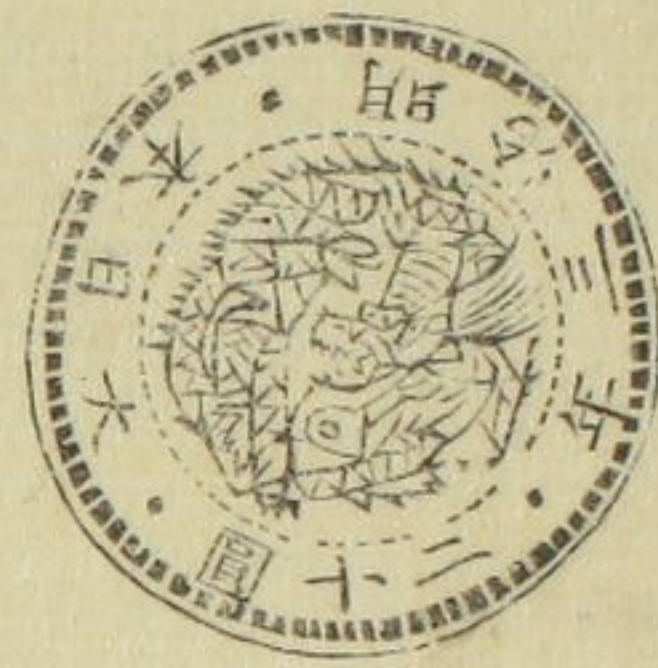


此五品の貨幣を、金とつゝ、幕府政を執るとき通用せしものなり。

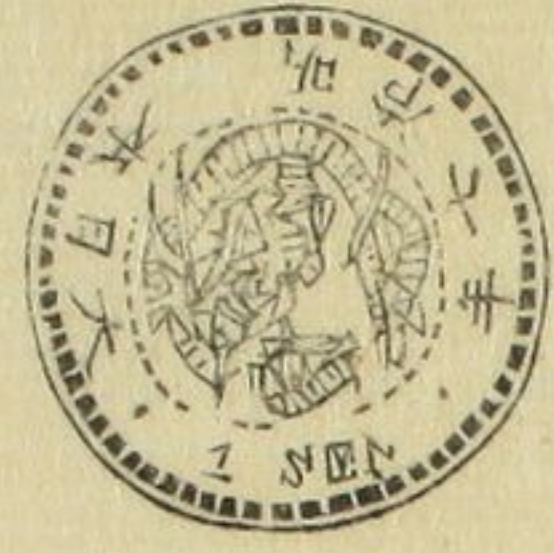
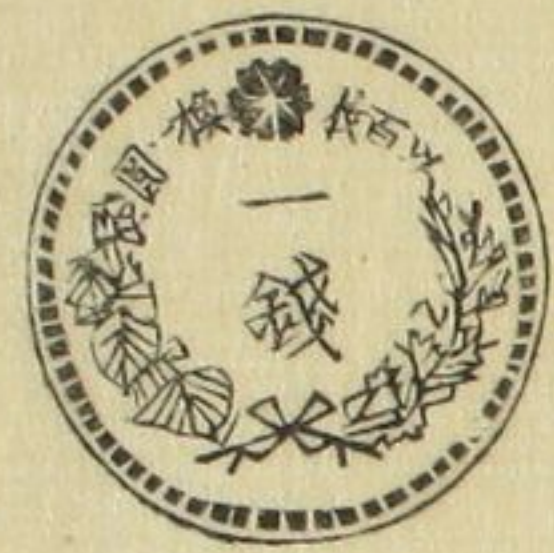


右五品の貨幣を、銀貨幣と云ふ

右五品の貨幣を、金貨幣と云ふ、



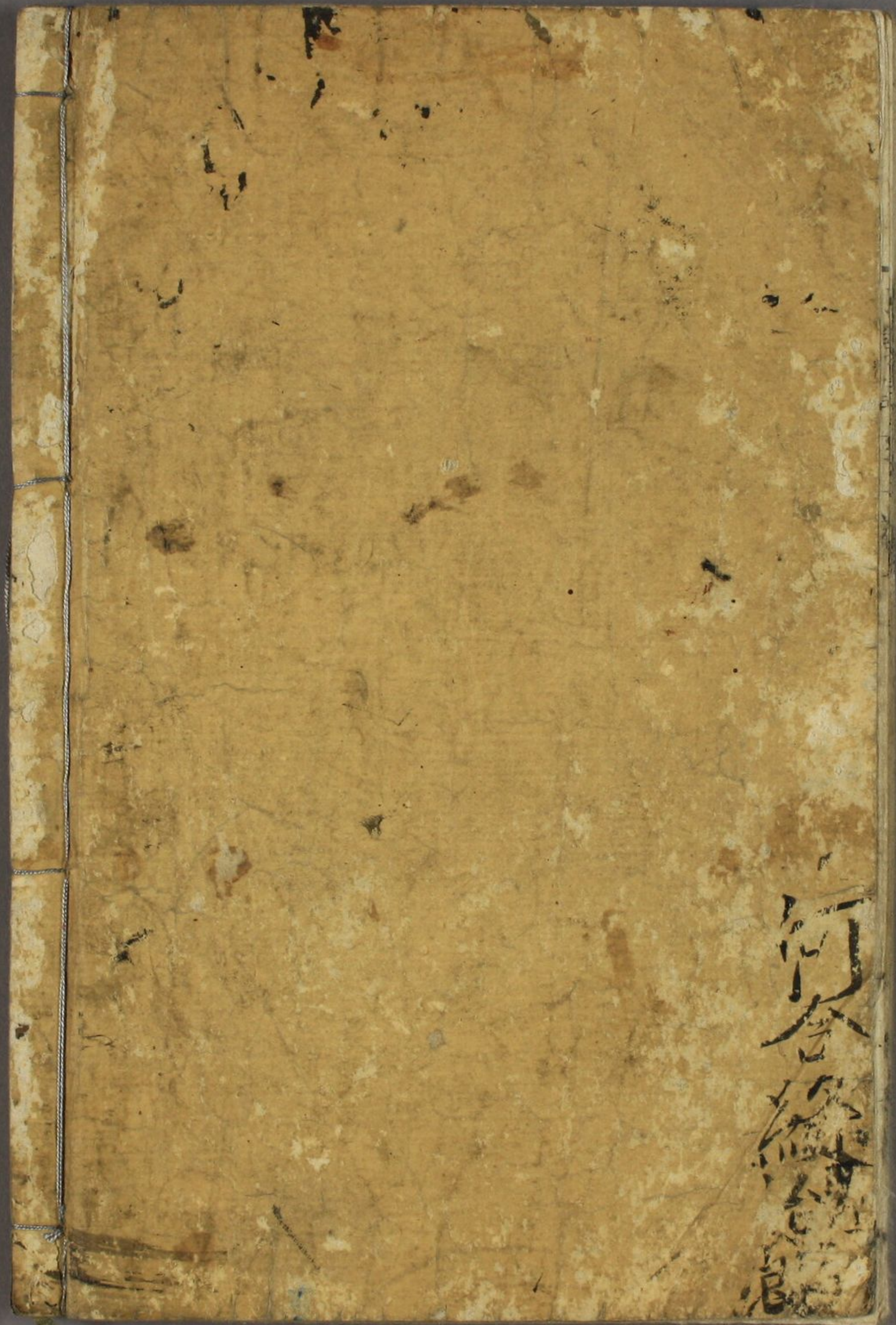
右三品を、銅貨幣と云ふ、  
此三種の貨幣は、朝廷の發行にて當今の通用也



日本書紀 卷之六十一  
三十一  
文部省

り、  
小銅錢一箇を一厘といひ、十厘を一錢といひ、百  
錢を一圓といふ故に、十二錢半を金貳朱と當と  
り、二十五錢を一分と當とり、五十錢を二分と當  
とすなり

小學讀本第一終



河  
卷  
一